

ナイーブ

作・演出 萬野 展

登場人物

伊達屋酔狂（伊達和彦） 三十五歳。雑文ライター。

西崎陽司 三十四歳。予備校教師。

那智健二 三十二歳。ヒモ。

高千穂マリ（高井真理子） 二十九歳。ビニ本モデル。

三平郷子 みひら 三十三歳。記者。

夏目明 三十六歳。私立探偵。

田島敏江 二十八歳。夏目探偵事務所事務員。

山下ゆう子 二十四歳。ダンサーの卵。

桑田幸司 二六歳。予備校教師。西崎の同僚。

前原潤子 三十歳。看護婦。

金井修二 二十五歳。ミュージシャン。

セキセイ・インコ 年齢不詳。右翼系始末師。

芦沢 五十三歳。芦沢脳神経外科病院院長。

本郷 四十二歳。芦沢病院の医師。

中村 三十歳。伊達屋担当編集者。

年増の女 那智の仕事相手のひとり。

美由紀 病院にいる女。

撮影助手 / 刑事たち / 運転手

銃を持った男たち / 血まみれの男

ACT 1 発端

舞台は闇のなかからにじみ出す。

東京のどこか。平成のいつか。マンションの一室。
舞台中央奥にはトイレらしきドアが見える。
七月の明け方。
五人の男女が眠っている。
ラジオの音。消し忘れたテレビモニターの明かり。

静寂の中、空間のどこかでかすかに異音が響き、
小さな紙切れのようなものが、上からヒラヒラと降ってくる。
紙切れは部屋の床に舞い落ちる。
誰も気づく者はいない。

男のひとり（西崎）が目を覚ます。

男はトイレに入って用を足す。

水音とともに出てくる。

タバコを探る。一本取り出す。唇に挟む。

西崎
…。

眠りかけている女のひとり（三平）に近づくと顔を見ている。ライターを取り出す。

ライターの火をゆっくり女の顔に近づけてゆく。

小さな炎の明かりが女の顔の影を揺らす。

女は目を覚まさない。

男の表情からは、なんの感情も読みとることはできない。

もうひとりの男（伊達屋）が首を立てて椅子から転げ落ちる。

伊達屋 あいて。…痛エ…。なんだ、寝ちまったよ…。あいてて、頭いてエ…。

西崎 （ライターを消して）朝だよ。

伊達屋 ああ。…なんだよ、みんな寝ちまってんのか…。

西崎 起こすか？

伊達屋 ああ。

伊達屋はトイレへ¹。

西崎 （咳払い、声を張る）よし、みんな、朝だぞ。起きろー。朝だぞー。仕事のあ
るやつは起きて仕事に行く。仕事のないやつは起きて仕事を探しに行く。ホラ、
起きた起きた。

女のひとり（マリ）が飛び起きる。

マリ 今何時！

西崎 お。えー（腕時計を見るが、していない）…昼、に近い、朝。

マリ まずい！ あたし撮影！（慌てて身支度を始める）

¹ トイレは舞台中央奥にあり、ドアは西部劇の酒場風に上半分がなくて、役者の上半身が見えるようになっている。

西崎 ハイ、仕事のある人は仕事に。撮影どこ？
マリ 北千住！

マリ、トイレへ。

伊達屋、入れ替わりに出る。

伊達屋 オハヨウ。

マリ おはよう！ どいて！

伊達屋 うわっと…

西崎 ほら起きた起きた。(まだ寝ている男、那智に) ナツちゃん起きな。マリちゃん
撮影行ってくつてよ。ナツちゃん！

伊達屋 女が仕事行くのにヒモが寝てていいのか？

那智 ……んんん…気をつけてな…。

西崎 ちがうよ、起きるんだよ。

マリ (トイレから) ちよつとあ、水出ないよオー！

伊達屋 あー、そつなんだよ。

マリ ねー、水出ないよオ！

伊達屋 なんか水溜まんのに時間がかかるんだよ、最近。

マリ ちよつとオ、聞こえてるー？

西崎 (トイレへ) マリちゃん、水溜まんのに時間かかるんだって！

マリ 時間ないのよあたし！

伊達屋 (寝ている三平に) オーイ、起きろ。サンペー。

三平 ……んー。

マリ ちよつと、なんとかしてよオ！

西崎 なんとかしてつたつて時間がかかるんだからしょうがねーじゃねーか。

伊達屋 オラ、起きろつてはサンペー。師匠。師匠！ (手を取って頭にあてがう) どー
もスイマセン…。

マリ ちよつと、出られないじゃないのよオ。撮影、遅刻できないんだからア！

西崎 だから行けばいいじゃない。

マリ 行けないわよ！

西崎 なんでよ。

マリ なんでよつてなによ。このままにして行けないでしようが！

西崎 なに、ひよつとして、大きいほうしたの？

ママの絶叫が部屋中にこだまする。

西崎 わあ。

伊達屋 うわ。

那智 ……(反射的に起きあがるが、また倒れ込む)

マリ してないわよ！ 小さいわよ！

西崎 ならいいじゃねえか…。

マリ よくないよくない絶対いや！ 健二は？ 健二起こしてよ！

西崎 ホラ、那智くん。マリちゃんが朝っぱらから人生最大の危機に直面しているぞ。
起きろつたらオマエは。

伊達屋 (三平相手にまだ遊んでいる) なんだつてもうタイヘンなんすから、もう。

三平 (目を覚ます)…なにしてんの。
伊達屋 あ。ドーモすいません。

三平 今何時？

伊達屋 (腕時計を見る。していない) 今何時だよ。

西崎 えー…マリちゃん今何時？

マリ えー、今…(時計を見ているらしい)…あ、もう駄目、あたし行く。

マリ、トイレから飛び出す。

西崎 えッ。いや、だって…

マリ いいッ？ ケンジ以外誰も入っちゃ駄目だからね。わかったッ！

マリ、バッグを取って出ていきかける。

マリ 絶対だからね！ 水が溜まったらケンジに流させて！ いいッ？…見たら、タマ潰すよ！

西崎・伊達屋、神妙に頷いている。
マリ、ドアから飛び出していく。

伊達屋・西崎 ……。

競ってトイレに殺到する男ふたり。
トイレ前で激しい揉み合い。

伊達屋 あ、ちょっと待てコノ…！

西崎 おまえさつき入ったろ、あ、イテ。

伊達屋 そういうオマエは一番に入ったろうが。

西崎 テメ、狸寝入りしてやがったな！

伊達屋 あいてて、この。

西崎 おのれ負けるか。

伊達屋 …ちよ、ちよっと待て。待て待て待て！

ようやく離れる。息が荒い。

伊達屋 ……なんのために争っているんだかよくわからんぞ。

西崎 そう言やそうだな。

伊達屋 一緒に見よう、いっしょに。

仲良くトイレに向かうふたりに、騒ぎをよそ目に仕度していた三平が化粧しながら
声をかける。

三平 どうもよく事情が飲み込めないんだけどさ…。

伊達屋・西崎 ん？

三平 なにを見るって？

伊達屋 なにって…そりゃ…なあ。

西崎 (自信たっぷり) 黄金水だ。

伊達屋 オマエ凄いいこと言っなア、朝っぱらから。

西崎 聖水とも言っ。

伊達屋 もっ、ヘーんタイなんすから、もう。

三平 はあん。

伊達屋 はあん…って、なんかそつ落ち着き払っていられると、自分たちの馬鹿さ加減が両肩にのしかかってくるようで遣り切れなさを感ずるな。

三平 そんなの見てなんか面白いの？

伊達屋 面白いか？ 面白くないよ。面白くないけどまあ…強いて言えば、あの過激なリアクションには興味があるな。

三平 リアクションて？

伊達屋 いやマリちゃんのさ。だってピニ本のモデルだけ。もつとスゴイところを大勢の前で見せてるわけだろ？

三平 だってそれは仕事でしょうよ。

伊達屋 仕事だって、そりゃ仕事だけどさ、じゃあ、じゃあ、仕事用のオシッコとかあるか？ ないだろ？

三平 この話、やめない？ 朝だし。

伊達屋 だからおれが言いたいのはね、あの子の羞恥心のありようってどういうの？ オシッコにおける公私混同って…

三平 あたしが言いたいのはね、朝の会話に選択の自由は許されなかったっていう話をしている。朝した話の内容がさ、その日一日頭について離れないってことであるじゃないの。そうするとあたし、今日一日マリちゃんの黄金水のことを頭の片隅で考えながら過ごさなきゃならないわけよ。わかる？

伊達屋 うん、わかるような気がする。

三平 ありがと。じゃ、あたし帰って着替えて仕事行くね。

伊達屋 ハイ。

三平 昨日の話、ホントにやるのね？

伊達屋 ああ、やるよ。来月からな。

三平 じゃ編集に話しくからね。オヤスミ。

伊達屋 お疲れ。

三平、西崎に手を振って、退場。
部屋には、男三人が残される。

伊達屋 …おまえ、仕事は？

西崎 ない。…昨日の話ってなんだ？

伊達屋 ああ、師匠んとこの雑誌にコラム書くんだ。こんなちっちゃいやつだけどな。金がいいんだ。…あああ、金が欲しいなあ。今正直言ってこの家賃重いなだよ。ここんとこロクな仕事がなくてさ。「モスキー」潰れたら、「暗黒大陸」廃刊だろ、「スワップ」休刊だろ、残ってるの「釣りと鉄道」の投稿欄と、「SFコミック」のマンガの原作と、「オーゲ」の解説記事だけだもんだよ。

西崎 「オーゲ」ってなんだ？

伊達屋 「オー！ ゲートボール」ですよ。

西崎 はあん。

伊達屋 ライバルに差をつけるゲーム運び教室、っていうコーナーがあつてだな、それ書いてんの、おれ。

西崎 ゲートボールなんてやったことあんのか、おまえ。

伊達屋 ない。…毎回さ、中国の、孫子の兵法へいほうってあんだろ。エイヤってあれを出鱈目に開いてだな、目についたところをとにかく引用しておいて、それを無理矢理ゲートボールの戦術に結びつけるわけだよ。

西崎 なるほどね。楽だな。

伊達屋 だろ？…もうやめてえよ。心底つんざりしてるぜ。

男ふたりは少し黙る。

太平楽に寝こけている那智を眺める。

西崎 …行くわ。

伊達屋 仕事ないって言わなかったか。

西崎 別口のバイトさ。

西崎、上着を拾って出ていく。

伊達屋、それを見送り、なんとなく一息つく。

ふと、床に小さな紙切れが落ちていたのを見つけ、それを拾う。

伊達屋 …。

那智 むっん…

那智、寝返りを打った拍子に床に転げ落ちる。

那智 ……つててて…

伊達屋 朝だぞ。

那智 あれ、伊達ちゃんだあ…

伊達屋 マリちゃん仕事行つたぞ。

那智 あ、つつ…。ああ寝違えてら…。ああ飲み過ぎたなあ…。

伊達屋 おまえ一番飲んだ。一番飲んで一番先に寝た。

那智 伊達ちゃんちで飲んでたんだっけ…。「曲がり屋」で飲んでる夢みてた…。

伊達屋 「曲がり屋」からウチに来たの。

那智 誰いたっけ？ 伊達ちゃん、おれ、マリ、…先生いたっけ？

伊達屋 西崎はバイトに行つた。あと三平郷子。

那智 ああサンペー師匠いたのか。おれ口説いた？

伊達屋 マリちゃんいるのに口説くのか？

那智 ああマリもいたのか。…あいつ今日仕事じゃなかったかな。

伊達屋 行つたよ、だから！ おまえにトイレの水流してほしいって。

那智 トイレ？ あ、トイレいこつ。

西崎、突如としてドアより再突入。

迷いのない足取りでトイレへ。

那智 あ、先生。

西崎、トイレへはいる。

しまった、という顔の伊達屋。

水を流す音。

西崎、トイレから出てきてふたりに頷き、すたすた退場。

伊達屋 …。

那智 ……なにあれ。

伊達屋 マリちゃんがあとでおまえにトイレのこと聞くから、そしたらおまえ、おまえが流したって言ったぞ。言ったぞ。

那智 はあ？

伊達屋 いいからそう言えはいいの。そう言うことでおまえはね、世の中にかかる悲劇をひとつ、回避することができるの。

那智、伊達屋のご託を聞き流してトイレへ入る。

伊達屋は、相変わらず手にした紙切れに気を取られている。

那智 これから仕事すんの？

伊達屋 これから寝る。仕事は夜。

那智 まださ、あのホラ、SF雑誌のマンガ書いてんの？

伊達屋 おれがマンガ書いてるわけじゃねえよ。おれがやってんのは原作。

那智 (トイレから出てくる) 伊達ちゃんいつ書いてくれんだよ、おれの話。

伊達屋 おまえの話？ そんなの書くなんて言ったか、おれ。

那智 これだよ。まったくいい加減なんだからなあ。

伊達屋 … ナツちゃん。

那智 ー？

伊達屋 これ、おまえが持ってきたのか。

那智 なにを。

伊達屋 これ。この紙切れ。

那智 なにそれ、新聞？

伊達屋 そう、だろうな。

那智 なんでおれが新聞の切れ端なんか持ってくるの。

伊達屋 うん。…これ、なんだろうな。

那智 なんだろうなって、新聞の切れ端

伊達屋 そうだけど。

那智 なんだよ、どうしたの。

那智、伊達屋から紙切れを取り上げる。

那智 …「トキノミコト、三馬身差で圧勝」…スポーツ新聞かな。これがどうしたって
いうの。

伊達屋 よくわかんないんだけどさ…それ変じゃねえか？

那智 だからなにが。

伊達屋 日付のとこ見てみな。

那智 日付…？ 七月二十二日(木)。昨日のだ。平成十一年。…え、十一年だった、今年。

伊達屋 十年。

那智 …。

伊達屋 だよな。変だろ？

那智 これ、来年の新聞？

伊達屋 そういつことになるよな。

那智 誤植だよ、誤植。

伊達屋 おれも最初はそう思った。そのトキノミコトって馬な、けっこう血統がいいんで前評判は高いんだけど、まだ未勝利の三歳馬なんだ…。

那智 ふうん。じゃ、ようやく一勝あげたわけだ。「トワイライトステークスで大穴」って書いてあるな。

伊達屋 うん…。そのレースな…四歳馬のレースなんだ。

沈黙。

判断不能状態の間抜け面を見合わせている男ふたり。

那智 ……それ伊達ちゃんのお勘違いじゃない？

伊達屋 さつきからずっと思いついてたんだけど、間違いない。トキノミコトは三歳馬だ。

那智 と、いうコトは、

伊達屋 というコトは、……どういことだろう。

那智 ……これでイッパツ大儲けができるってことじゃないかな。

伊達屋 (笑) そうだよな、そう考えるのが男の子ってもんだよな。

那智 (笑) 一年先の話だからさ、今から気合い入れて金貯めてさ。

伊達屋 (笑いつつ) もう一千万くらいつくってドーンと。

那智 (笑い転げる) ストーンとイッパツ勝負。

伊達屋 (笑い転げる) 二十倍としたっておまえ。

那智 (ゲラゲラ) 二十万！

伊達屋 そうだよ！…バカ！ 違う、二十倍だよ、二億！ (ゲラゲラ)

那智 あー二億か、すげえな、二億。(ゲラゲラ)

伊達屋 三十倍なら三億！ (ゲラゲラ)

笑い転げている。

しだいに笑いがおさまり、何ともいえない沈黙が下りる。

那智 ……あーあ。(笑い疲れてぼうつ然としている)

伊達屋 ……。

那智 ……じゃ、おれ、帰るわ。

伊達屋 ああ。

那智 あー、バカだった。(ドアへと向かう)

伊達屋 ……ナツちゃん。

那智 ーん！

伊達屋 今夜おれ十二時ごろ仕事終わるから、マリちゃん連れて、来ねえか。

那智 ああ、いいけど。

伊達屋 西崎と、師匠も呼んどく。

那智 わかった。じゃ。

伊達屋 ああ。

那智、退場。

伊達屋 笑いの余韻と不安がまぜこぜになった表情のまま、紙切れを手に立ち尽くす。

音楽。

急速に日が暮れていく。

シルエットと化した伊達屋がラジオを止める仕事をすると、音楽が止まる。周囲が明るくなると、那智、マリ、西崎、三平がいる。伊達屋は手にした紙切れを一同に回す。

伊達屋 … 問題は、おれたち五人が、総額二千万なり三千万なりの金をこのレースに注ぎ込んだとして、オッズがどれだけ下がるかということだ。

マリ オッズって？

伊達屋 賭けの倍率のことだよ。

マリ 倍率が下がるとどうなるの？

伊達屋 だーかーらー…

三平 配当金が少なくなるのよ。

マリ 配当金で？

那智 オマエ黙ってるよ。

マリ だって知らないんだもん、競馬のことなんて。

西崎 つまり儲けが少なくなるんだよ。

マリ 損しちゃうの？

伊達屋 一概にそうとも言い切れないけど。

那智 倍率が低くても掛け金が大きけりゃ儲けも大きいってこともあるしな。

マリ もし五百万貯めたとして、それがいくらになるの？

伊達屋 いわゆる万馬券なら百倍。

マリ 百倍ってことは…

那智 百倍だよ、百をかければいいの。

マリ 五百万の百倍？ えーと…

伊達屋 五億だ。

一同、黙り込む。

伊達屋 … けどな、ひとり五百万準備したとして総額二千五百万。それだけの額をひとつのレースにつき込んだら、当然オッズだって下がるはずだよ。

那智 けどさ、百倍が半分の五十倍だって、ひとり二億五千万だぜ。

西崎 税金のかからない金だ。利息で食えるな。

那智 どうする？

三平 … ちよつと待ってよ。よく考えてよ。だいたいこの新聞いったいどっからきたの？ こんな鵜呑みにして信用していいの？

伊達屋 そこなんだよなあ…。だけどコレ本物じゃないとしたらなんだ？

西崎 誰かの手の込んだイタズラか。

伊達屋 誰がそんなことする。そんなことしてなんになるんだ。

西崎 さあ。

三平 仮にこれが本当に未来の新聞だとしてもよ、本当にこの馬が勝つって言い切れる？ 伊達屋 …。

三平 もしあたしたちがそれを信じて大金を賭けて、その結果大穴じゃなくなっちゃったら…この記事に書いてあることは部分的に嘘になるわけでしょ？

西崎 大穴っていう部分はね。

三平 つまり未来は変わっちゃう、変わる可能性があるってことよね？

伊達屋 でもな、逆に未来は変えられないとすればどつだ？ おれたちがこのレースに金をつぎ込んでレースの結果にまで影響が及ばないとすれば……

三平 あたしたちが本当にそうするかどうかわからないでしょ。…だいたい五百万なんて一年で作れるの？

那智 五百万くらい…無理かもしれないな。

伊達屋 おまえまず仕事見つけるのが先だろうが。

那智 サラ金借りてみる？

マリ ちよつとやめてよ、そこまですることないじゃないの。

沈黙。

西崎 おれ、やるよ。

一同 ……

西崎 面白いからやるよ。そんだけ。どうせ同じ一年なら、なんか目的があったほうがいいじゃねえか。やってもやらなくても一年は経つんだ。

マリ ……あたしもやる。うまくいったら二億入るんでしょ？ そしたら小さなマンション買って遊んで暮らす！

那智 おまえはいいよな、五百万なんてあつという間だもんなあ。

マリ なんでよ、大変よ、五百万なんて。

那智 だからおまえビデオやれっていうの。ビデオのほうが金になるんだから。

マリ ぜつつしたいヤダ。ビデオなんてあんな恥ずかしいものやりたくない。あたしは一次元の女なの。

那智 あ、そう。一次元。…一次元？ 点だけ。

西崎 線だ。

伊達屋 師匠、どうする？

三平 あんたこそどうすんの？

伊達屋 そうだなあ、おれは国外脱出して、南の島で暮らそうかなあ。

三平 んなこと訊いてんじゃないわよ。

伊達屋 わかつてるよ。けどな、西崎の言う通りだよ。おれらこのままルーズにいつも通りの一年を過ごすより、なんていうか、いつもと違う目的が欲しいんだと思う。…やるよ、おれも。

三平 そう。わかったわ。とにかく危ない橋は渡らないこと、最低限のルールにしましょ。こんな紙切れ一枚で身を滅ぼすことになったら馬鹿馬鹿しいでしょ。

伊達屋 仕切る仕切る。

那智 そういうあなたはどうぞすんだよ。

三平 あたし？ あたしは…

伊達屋 ハイ。

三平 ……やるわよ！ あたしだけ指くわえてろっていうの？

伊達屋 最初から素直にそう言やいいんだよ。

那智 そうなるとおれ不利だなあ。仕事見つけなきゃ。

伊達屋 いいことだ。この紙切れのおかげで更正できる。

マリ あんた無駄なことしない方がいいんじゃないの？ 女で喰ってるんだから女で五百万作りなさいよ、いっせ。

那智 よろしく。

マリ なに言ってるの。あたしは自分のぶんで精一杯なんだからね。自分で稼ぎなさいよ。

伊達屋 そうだぜ、遊びは自分の金でやんなきゃな。

三平 サラ金に走らないでよ、いきなり。

西崎 強盗もカツアゲもなしだぞ。

那智 あのな…。おれをいつたいなんだと思ってるんだ。

マリ ヒモ。

西崎 ヒモだな。

那智 バカヤロ。五百万くらいあつという間に作ってみせらあ。(と見栄を切っておいて、ニヤリと笑う)……女で。

一同のため息のなか、暗転。

ACT 2 依頼

ラジオのチューニングの音がする。

夏目探偵事務所。

男（夏目）がラジオのチャンネルを変えている。

事務をとる女（田島）がひとり。

ラジオから暑苦しい歌謡曲などが流れ、探偵はスイッチを叩き切る。

暑い日である。

夏目 … 畜生、なんてクソ暑いんだ。

田島 暑い暑いっておっしゃらないで下さい。よけい暑くなります。

夏目 … 田島くん、クーラー直すの幾らくらいかかる？

田島 直すより買うほうが安上がりです。あれはもうクーラーとは呼べません。

夏目 じゃなんだろう。

田島 電気エネルギーを耳障りな騒音に変換する箱ですね。修理に出すより燃えないゴミの日に出すべき代物です。

夏目 ありや知り合いからの預かりものなんだよ。

田島 ではそのお知り合いのかたに引き取っていただいて処分していただいたらいかでしょうか。なまじクーラーのような形をした箱があると期待してしまいますから。

夏目 … ずいぶんカリカリしてるじゃないか、今日は。

田島 … 給料をいただいてないから怒りっぽくもなります。クーラーがお給料かどちらかをなんとかしてください。

夏目 … 給料こないだ払ったばかりじゃなかったっけ？

田島 先月の二十日にいただきましたけどそれは五月分で二ヶ月の遅配です。それから三十五日経ちますが六月分は未だにいただいております。今日が八月二十四日であることをお忘れなく。

夏目 … 今がどん底なんだよ。… それにしても先月あれほど忙しかったのにどうしてこんなに金がないんだろうなあ。

田島 入る端から使うからです。収入以上に支出がかさんでいるからです。

夏目 … なるほどなあ…。

田島 なるほどじゃありませんよ。所長ほど仕事を選ばずに家出人捜索から果ては迷い猫探しまで、かたっぱしから引き受けて毎月これほど大量の仕事をこなしている探偵は東京中探したって他にいないんですよ。それなのにどうしてお金が残らないのか、不思議でしょうがありません。

夏目 … 使ったくだ、おれもそれが不思議なんだよ。どうしてなんだろうなあ。

田島 … 使ったことなんです。毎晩銀座で豪遊してるわけでもない、慈善団体に寄付する趣味があるわけでもない。わけがわかりません。この事務所の家賃だって私が何度催促を受けているか、所長はごぞんじないでしょう。私は大家さんに頭を下げるためにここに勤めているわけじゃありませんから。

夏目 … 使ったことなんです。毎晩銀座で豪遊してるわけでもない、慈善団体に寄付する趣味があるわけでもない。わけがわかりません。この事務所の家賃だって私が何度催促を受けているか、所長はごぞんじないでしょう。私は大家さんに頭を下げるためにここに勤めているわけじゃありませんから。

田島 … 使ったことなんです。毎晩銀座で豪遊してるわけでもない、慈善団体に寄付する趣味があるわけでもない。わけがわかりません。この事務所の家賃だって私が何度催促を受けているか、所長はごぞんじないでしょう。私は大家さんに頭を下げるためにここに勤めているわけじゃありませんから。

夏目 … 使ったことなんです。毎晩銀座で豪遊してるわけでもない、慈善団体に寄付する趣味があるわけでもない。わけがわかりません。この事務所の家賃だって私が何度催促を受けているか、所長はごぞんじないでしょう。私は大家さんに頭を下げるためにここに勤めているわけじゃありませんから。

田島 … 使ったことなんです。毎晩銀座で豪遊してるわけでもない、慈善団体に寄付する趣味があるわけでもない。わけがわかりません。この事務所の家賃だって私が何度催促を受けているか、所長はごぞんじないでしょう。私は大家さんに頭を下げるためにここに勤めているわけじゃありませんから。

夏目 … 使ったことなんです。毎晩銀座で豪遊してるわけでもない、慈善団体に寄付する趣味があるわけでもない。わけがわかりません。この事務所の家賃だって私が何度催促を受けているか、所長はごぞんじないでしょう。私は大家さんに頭を下げるためにここに勤めているわけじゃありませんから。

田島 … 使ったことなんです。毎晩銀座で豪遊してるわけでもない、慈善団体に寄付する趣味があるわけでもない。わけがわかりません。この事務所の家賃だって私が何度催促を受けているか、所長はごぞんじないでしょう。私は大家さんに頭を下げるためにここに勤めているわけじゃありませんから。

夏目 … 使ったことなんです。毎晩銀座で豪遊してるわけでもない、慈善団体に寄付する趣味があるわけでもない。わけがわかりません。この事務所の家賃だって私が何度催促を受けているか、所長はごぞんじないでしょう。私は大家さんに頭を下げるためにここに勤めているわけじゃありませんから。

田島 … 使ったことなんです。毎晩銀座で豪遊してるわけでもない、慈善団体に寄付する趣味があるわけでもない。わけがわかりません。この事務所の家賃だって私が何度催促を受けているか、所長はごぞんじないでしょう。私は大家さんに頭を下げるためにここに勤めているわけじゃありませんから。

夏目 … 使ったことなんです。毎晩銀座で豪遊してるわけでもない、慈善団体に寄付する趣味があるわけでもない。わけがわかりません。この事務所の家賃だって私が何度催促を受けているか、所長はごぞんじないでしょう。私は大家さんに頭を下げるためにここに勤めているわけじゃありませんから。

田島 … 使ったことなんです。毎晩銀座で豪遊してるわけでもない、慈善団体に寄付する趣味があるわけでもない。わけがわかりません。この事務所の家賃だって私が何度催促を受けているか、所長はごぞんじないでしょう。私は大家さんに頭を下げるためにここに勤めているわけじゃありませんから。

夏目 … 使ったことなんです。毎晩銀座で豪遊してるわけでもない、慈善団体に寄付する趣味があるわけでもない。わけがわかりません。この事務所の家賃だって私が何度催促を受けているか、所長はごぞんじないでしょう。私は大家さんに頭を下げるためにここに勤めているわけじゃありませんから。

田島 … 使ったことなんです。毎晩銀座で豪遊してるわけでもない、慈善団体に寄付する趣味があるわけでもない。わけがわかりません。この事務所の家賃だって私が何度催促を受けているか、所長はごぞんじないでしょう。私は大家さんに頭を下げるためにここに勤めているわけじゃありませんから。

夏目 … 使ったことなんです。毎晩銀座で豪遊してるわけでもない、慈善団体に寄付する趣味があるわけでもない。わけがわかりません。この事務所の家賃だって私が何度催促を受けているか、所長はごぞんじないでしょう。私は大家さんに頭を下げるためにここに勤めているわけじゃありませんから。

田島 … 使ったことなんです。毎晩銀座で豪遊してるわけでもない、慈善団体に寄付する趣味があるわけでもない。わけがわかりません。この事務所の家賃だって私が何度催促を受けているか、所長はごぞんじないでしょう。私は大家さんに頭を下げるためにここに勤めているわけじゃありませんから。

夏目 … 使ったことなんです。毎晩銀座で豪遊してるわけでもない、慈善団体に寄付する趣味があるわけでもない。わけがわかりません。この事務所の家賃だって私が何度催促を受けているか、所長はごぞんじないでしょう。私は大家さんに頭を下げるためにここに勤めているわけじゃありませんから。

田島 … 使ったことなんです。毎晩銀座で豪遊してるわけでもない、慈善団体に寄付する趣味があるわけでもない。わけがわかりません。この事務所の家賃だって私が何度催促を受けているか、所長はごぞんじないでしょう。私は大家さんに頭を下げるためにここに勤めているわけじゃありませんから。

夏目 … 使ったことなんです。毎晩銀座で豪遊してるわけでもない、慈善団体に寄付する趣味があるわけでもない。わけがわかりません。この事務所の家賃だって私が何度催促を受けているか、所長はごぞんじないでしょう。私は大家さんに頭を下げるためにここに勤めているわけじゃありませんから。

田島 … 使ったことなんです。毎晩銀座で豪遊してるわけでもない、慈善団体に寄付する趣味があるわけでもない。わけがわかりません。この事務所の家賃だって私が何度催促を受けているか、所長はごぞんじないでしょう。私は大家さんに頭を下げるためにここに勤めているわけじゃありませんから。

夏目 … 使ったことなんです。毎晩銀座で豪遊してるわけでもない、慈善団体に寄付する趣味があるわけでもない。わけがわかりません。この事務所の家賃だって私が何度催促を受けているか、所長はごぞんじないでしょう。私は大家さんに頭を下げるためにここに勤めているわけじゃありませんから。

夏目、田島の舌鋒に辟易しながらも、田島の真正面に立って反撃。

夏目 わかったよ、わかった！ 君みたいな有能な事務員は、おれみたいなボンクラ探偵にはもつたない。愛想が尽きるのもムリはないんだ。同情はいらぬよ。辞めたいならやめたいと、はっきり言うてくれないか。

田島 とんでもございませぬ。遅れているお給料をいただくまで、私は一歩たりとも動きませぬ。

夏目 …。

夏目と田島、ため息をつきつつ、もとのポジションに戻っていく。
チャイムの音。

立ち去る田島を制して夏目、ドアを開ける。

背広姿の男（本郷）、登場。

本郷 あの…、夏目探偵局というのは「ちび」で…？

夏目 そうですが。

本郷 あなたが夏目さんですか？

夏目 夏目だけでも、まあ、今日のところは夏目でなくてもいいんだけど…

本郷 折り入ってご相談したいことが…

夏目 弱ったなあ。いやねエ、私のところはね、浮気調査からペットの失踪まで、よろず調査承りますってことで、まあ、早い話がナンデモ屋だったんですが…

本郷 だった、とおっしゃいますと…

夏目 たった今看板をつけかえましてね。薄利多売は返上したんです。セコい仕事は引き受けない。ろくに金にならないくせに経費ばかりかさむような仕事はね。あと仕事に成功したとたんに金も払わず苦労して探し出した娘と手に手をとってトーンズするような不真面目な依頼人もお断りです。それから政治がらみに軍事がらみ宗教オカルトエコロジー空飛ぶ円盤の追跡なんていうエキセントリックな依頼もあたしの手に余る…

田島、咳払いで夏目の際限ない饒舌をさえぎる。

夏目 おや田島くん風邪かい？ 気をつけなさいいけないよ。クーラーの効かせ過ぎは体に毒だ。

田島 お茶をお持ちします。

夏目 あ、奥に頼むよ。

田島、夏目を睨みつけて退場。

本郷 料金は前払いで全額お支払いします。

夏目 いや失礼、今のは冗談です。こういう仕事は前金として半額、仕事が済んだら成功報酬と必要経費をいただくのが通例ですから。

本郷 金に糸目をつけるつもりはありません。

夏目 けっこうな話ですな。しかしまず依頼の内容をつかがわれないことには。引き受けるかどうかはそれからです。第一まだあなたの名前さえ聞いて…

本郷 この女性の居場所を探し出していただきたい。

本郷、写真を取り出す。

夏目 …。(写真を受け取る)

本郷 名前は前原潤子といいます。

夏目 (ぎょっ)として相手を見る(あなたが?)

本郷 …。

夏目 (冗談が通じない相手らしい)(この女性ですね、勿論…で、あなたは?)

本郷、黙って名刺を渡す。

夏目 (名刺を見て)本郷さん、ね。本郷さんに、マエハラジュンコさん…(両手に名

刺と写真)。このふたりの関係は?

本郷、深刻な様子で黙っている。

夏目 …。(ひそかなため息)…とにかく…詳しい内容をうかがいましょうか。

夏目、本郷を奥の部屋へと促す。

本郷、退場。
探偵、退場。

ACT 3 推進

公園のような場所。
 タンサー風の女(ゆづ子)、ミュージシャン風の男(修二) 登場。
 別れ話特有の重たい空気。

ゆづ子 …… いたいことあるんです。いいなさいよ。

修二 別に。

ゆづ子 別れたいんですよ。

修二 ……。

ゆづ子 黙ってないでなんとかいいなさいよ。

修二 ……。

ゆづ子 あんたそうやっていつも黙ってばかりじゃないのよ。黙ってて、そんなあたしに別れるっていわせて、自分で言えないこと全部あたしにいわせて、自分はなにもしないで済ますつもりなんですよ。ずるいわよ。

修二 ……。

ゆづ子 いいなさいよ。自分の口から言ってみなさいよ。

修二 別れてくれ。

ゆづ子 ……。

修二 そう言ったらオレと別れるっていつか？ 今までそうだったか？

ゆづ子 ……。

修二 気に入らないことは全部オレのせいにして、泣けば全部自分の思い通りになるのかよ。

ゆづ子 そんなこと思っていない…

修二 もうイヤなんだよ。

ゆづ子 イヤだからなによ。誰がそんなふうにしたのよ。

修二 オレだよ！ そういいたいんだろ！

修二、手にした荷物を地面に叩きつける。逆ギレか。

ゆづ子 (相手の勢いに怯みつつも、もう止まらない) そうよ、あんたよ。あんたが…

嘘ばっかりつくからよ！

修二 だからもう終わりにしようって言ってんだよ！

ゆづ子 ……。

那智登場。物陰に隠れて様子をつかがう。

ゆづ子 鍵…返してよ…

修二、鍵をゆづ子に向かって放る。取り損なって地面に落ちる。

修二 ……じゃあな。

ゆづ子 あなたの荷物どうするのよ。

修二 捨てていいよ。別にたいしたもんないから。

ゆづ子 捨てられないわよ。勝手言わないでよ！

修二 ……。…めん。あとで取りに行くよ。

修二、退場。
 ゆづ子、立ち尽くす。
 やがて鍵を拾い、歩き出す。
 那智、物陰から出てくる。

那智 ゆづ子！

声をかけた瞬間、見事に前のめりにこける那智。
 すかさず腕立て伏せ。
 すべては計算し尽くされたプロの技である。

ゆづ子 …。 なによ。 誰よあんな。

那智 (顔を上げ) おれだよ。

ゆづ子 …健二…？

那智 久しぶりだな。

ゆづ子 健二！ 嘘、どうして？

那智 たまたま通りがかった。

ゆづ子 …見たなの？

那智 なにを？

ゆづ子 振られちゃった、あたし。

那智 珍しいじゃねえか。

ゆづ子 あんたのときは振ったのにね。

那智 レッスンの帰りか？ 送るよ。

ゆづ子 新しいアパート知らないでしょ。

那智 そうか、越したのが。

ゆづ子 あのあと、すぐね。

那智 おれの荷物あったろ。

ゆづ子 捨てた。(笑う)

那智 やっぱり。(笑いを返す)

並んで歩き出すふたり。

ゆづ子 健二、あたしね…

那智 ん？

ゆづ子 あたし、あんなこと捨てたんだって思ってたけど、違ってたことに気づいたの。 あんたさ、あたしに捨てられるようにし向けたでしょ。

那智 そんなことしてへんよ。

ゆづ子 なんで大阪弁やねん。

那智 …。

ゆづ子 …。(何事もなかったかのように歩き出す) あたしあのあと気づいたの。 健二 はあたしが捨てないでくれってすがる女の役を演じなくて済むようにしてくれたんだって。

那智 …。

ゆづ子 どうにもなんなかったもんね、あのころのあたしたち。

那智 かもな。

ゆづ子 (明るく) どう？ 相変わらず女泣かしてる？

那智 ゼンゼン。真面目なもんだよ。

ゆう子 更正した？
 那智 そういうこと。
 ゆう子 ここなの。
 那智 ああ。じゃあ、またな。
 ゆう子 うん。ありがとう。

那智、去りかけ、戻ってきて、ゆう子の前髪をくしゃくしゃにする。

那智 しよぼくれたツラすんなよ。

ゆう子 ……うん。

那智 今度飲もうや。

ゆう子 うん。…健二。

那智 ん？

ゆう子 今からじゃダメ。

那智 今から？ 飲むの？

ゆう子 仕事あるの？

那智 今日は休みだけど…。じゃ、どっか行くか？

ゆう子 うちでもいいよ。

那智 じゃ久々にやるか。イヤそういう意味じゃなく。

ゆう子 ちよっと待ってて、片づけるからさ。

那智 あいよ。

ゆう子、退場。

那智 ……一息つく。手帳を出す(えー、ゆう子、と。…あれ、上の名前なんだっけか。

(アパートの郵便受けを見る)あ、そうか山下ね…(書き込む)んー、どうかなあ、貧乏だからなあ…。

ゆう子 (声のみ)健二、いいよ、入ってー。

那智 はいよ。(大きく息を吸って)……いつてみつか。

那智、退場。

場転。

始業のチャイムらしき音。予備校。

西崎と同僚(桑田)、登場。

桑田 あ、西崎さん。もう始業ベル鳴ってますよ。

西崎 うん。あ、桑田くん、こないだ紹介してもらった父兄いるじゃない。ああいうの、またないかなあ…あららら。

桑田 (ギョツとして隅っこに連れて行く)なに言ってるんですか！こんなところでヤバい話しないでくださいよ。もう始業ベル鳴ってますって。次の国公立のBクラス、西崎さんでしように。

西崎 ああ、国公立B？ あいつらバカだからなあ、やりたくねえんだよ。

桑田 聞こえますって。行って下さいよ、ホラ、早く。

西崎 なんつーかさあ、もうちよっと大きく商売したいんだよあれ。

桑田 わかりましたって。声が大きいなあもつ。

西崎 やっぱりさ、ガキども相手じゃ金額もタカが知れてるだろ。もつちつとドーンと
いきたいわけよ。最近さ、また暴力団規制法が厳しくなるっちゅう噂があつて
さ、卸し元のほう今のうちに販路拡張しときたいらしいんだよ。

桑田 西崎さん、声が大きい…

西崎 なんとかなんないかなああ。もちろん君のぶん、いつも通り格安で下ろすから
さあ…

桑田 ほらっ！ 西崎さん！ テーマ曲かかってますよ。ほらチヨーク入れ持って！（声
をひそめ）……国公立理系クラスの副島って知ってます？

西崎 理系の？ ああ、Dクラスか？

桑田 そつ。添島和義。

西崎 あのバカね。四浪してるやつだろ。

桑田 あれの父親が、添島義一っていつそこそ名前前の通った建築家らしいんですが、
この男…（注射を打つ仕草を試みせる）やってます。若い頃アメリカのほうで
覚えてきたらしいですね。

西崎 今のルートは？

桑田 台湾経由らしいんですが、仕入れ元がバクられちゃって困ってるらしいんです。
…今なら言い値で商売できますよ。

西崎 …OK。（桑田の肩を叩く）ホラ、君も次、授業だろ。私立文系Aクラス特講
（チヨーク箱を渡す）じゃあな。

桑田 あ、西崎さん。…おれももつあんまり残りがありませんよ。

西崎 …。

西崎、振り返って、渡したチヨーク入れの箱を指す。

桑田、チヨーク箱を開け、なかの白い粉を指につけて舐めてみる。

桑田 …！

西崎、注射を打つポーズをしておどけ、退場。

桑田 …なんて人だよ。

桑田、退場。

西崎、教室へと登場。

歓声。高まるテーマ曲。

西崎 レディース・エン・ジェントルメン。西崎です。本日のメニューは先刻ご承知、
近現代史総括その6。南北問題の起源と展開。ためえらいくぜえっ！

大歓声のなか、マシンガンのように講義を始める西崎。

西崎、講義をしながら退場。

場転。

伊達屋の部屋。

チャイムの音がする。

伊達屋、登場。

伊達屋 はい。

声 伊達屋さん？ SFコミックの中村です。

伊達屋 ああ。

伊達屋 中村を部屋に入れる。

中村 どうも。

伊達屋 どうしたのこんな時間に。

中村 いやあ、ちよつと気になることがあって…。

伊達屋 お茶でも出そうか？

中村 あ、すいません。おかまいなく…。

伊達屋 どうしたの、なんか様子が変わだよ。

中村 …。

伊達屋 まさか、昨日渡したやつ、ポツたんじゃないだろうね。

中村 …いやいや、そういうことではないんです。マンガの斉藤先生も大変気に入って

まして。編集部でも評判です。

伊達屋 (苦笑)あのね…。おだてたって出るのはコーヒーぐらいだよ。

中村 恐縮です。

伊達屋 …中村さん、なんかホントに様子が変わだぜ。なんかあったんですか？

中村 ええ…あったと言えば…あったのかなあ…。

伊達屋 なんだか…なんですか、はっきり言ってくださいよ。僕に関係ある話なんですよ？

中村 ええ…たぶん…

伊達屋 …。まさかSFコミック、ポシヤるんじゃないでしょうね？ え？ 廃刊じゃないでしょうね？ 中村さん、そりゃないよ。おれこの仕事は今メインの収入源なんだよ。これチギれたらおれ生活できないよ。

中村 いや、違つんです違つんです。そついつた話じゃないんです。SFコミック、売れてます。だいじょうぶです。

伊達屋 ホントに？ 売れてんの？

中村 そこそこ売れます。つぶれませんが。だいじょうぶ。

伊達屋 じゃ、なんなのよ。中村さん、あなた顔色すこいよ。

中村 伊達屋先生。

伊達屋 はい。

中村 先生の原作による、SFコミック連載「ボンジョビ星人の恐怖」。その話のなかに、人間とそっくりでいつの間にか人間と入れ替わってなに喰わぬ顔で生活している異星人が出てきますよね。

伊達屋 出てきますよねって、そりゃあなた、担当のあなたがいちばんよく知ってるでしょうに。

中村 知っています。彼らは実体のない、いわば虚の世界の生物です。彼らは人間の肉体と精神に完全に同化してしまつ。周囲の人間も、本人さえも自分が乗っ取られたことも気づかない。よく知っています。僕もアイデア出したんです。

伊達屋 …。

中村 たったひとつ普通の人間と違つ点は、乗っ取られた人間が不死身になってしまうこと。切られても撃たれても死なない体になってしまうこと。それしか普通の人間との違いはない。そつでしたよね。

伊達屋 中村さん、落ち着きましょつよ。

中村 そつですよね！

伊達屋 そつ、そつです！ あなたの言つとおり。それが僕とあなたで考えたボンジョビ星人の正体でした！…しっかしすげえネーミングだよね、我ながら。

中村 ……いるんです。

伊達屋 は。

中村 いるんです、本当に。

伊達屋 はあ？ なにが？

中村 ……。

伊達屋 ……ボンジョビ？

中村 わたしのマンシヨンのとなりの部屋に住んでいるんです！

伊達屋 まいったな、こりゃ…。

中村 ホントなんです！ 伊達屋さん、あなた僕が狂つたと思ってるでしょう！

僕はね、この目で見たんだ！ 死なないんです。死なないんですよ！

激しくドアを叩くものがある。

伊達屋 ……。

中村 ……確かに、この手で…ナイフが根もとまで埋まつたんです。信じられないくらいの量の…血が…吹き出してきて…それなのに…あいつは…生きて…しゃべって…

伊達屋 中村さん…あなた…

激しいノックの音。

中村 助けてくれ…

伊達屋 中村さん、ドアの鍵、かけました？

中村、無言で首を横に振る。

バアン、とドアが開く音。

胸にナイフを突き立てたままの、血まみれの男が入ってくる。

伊達屋、中村、悲鳴を上げて逃げる。

血まみれ男 中村さあん…ご主人…ひどいじゃないですかあ…

中村 や、やめろ、やめてくれ…

血まみれ男 いくら僕が、中村さんの留守に奥さんとちよつとくらい寝たからって…なにも殺すことはないんじゃないかなあ…

中村 あ、あつち行け、この…

血まみれ男、フラフラとふたりを追つ。

そのたび、ふたりは悲鳴をあげて逃げまどう。

血まみれ男 中村さあん、ひどいですよあ…

伊達屋 中村さん、あんた、やったのか！

血まみれ男 やつたんですよ、ズブリと。

中村 悪かった！ おれが悪かったから死んでくれ！ 頼むから死んでくれよあ！

血まみれ男 奥さんだつてね…やり過ぎだつて言ってますよ。もうあの人にはついていけない、別れるつてねえ…だからね…

中村 わかつた、わかつたから！ 欲しけりゃくれてやる。二人でどこへでも行って好きに暮らしていいから、だからちゃんと死んでくれよあ！

伊達屋 中村！ 言ってることがメチャクチャだぞ！

血まみれ男 だからね、僕、言ったんですよ。奥さんにね。あんなご主人は、僕が始末してやるって…

血まみれ男、コートの中に隠し持ったライフルを出して構える。
ふたり、それを見て悲鳴をあげて逃げまどう。

伊達屋 まてまてまて！ 早まるなっ！

血まみれ男 オアイコですよね中村さん。あんた僕のこと殺したんだから。

中村 やめてくれ、おれは、おれは人間なんだ。ボンジョビじゃないんだから！

血まみれ男 おかしな名前つけないでくださいよ。…僕だっごく普通の人間なんですから…

伊達屋 普通じゃねえよ全然。…わあ、銃口こっち向けるな。あっちあっち！

中村 この裏切り者、責任とれ！

伊達屋 なんの責任だよ！

ジャキッ、と銃のレバーを引く血まみれ男。

中村 わわ。

伊達屋 ちょっと待ってってば！

血まみれ男 ふふふふふ…自分の仇。食らえ！

轟音。

ふたり、絶叫。

一瞬の暗転。

なにこともなかったように伊達屋の原稿を見ている中村。

伊達屋 ……てな感じの話なんだけど。

中村 ……ウン、いける。いけるけど伊達さん、おれの名前実名で出すのやめて。

伊達屋 いいでないの、中村なんてどこにもある名前なんだからさ。わかんないって。

中村 わかるって、こんだけ極端な楽屋落ちだよ。

伊達屋 あそつ。…で、どうすんだよ。使ってくれろ？

中村 このあとどうなるんです？

伊達屋 それはまあ、あとのお楽しみってことだよ。

中村 考えてないんですね。…ま、いいでしょ、今回はこれでいきましょう。

伊達屋 (手を打って) よっしや。

中村 ……それにしても伊達さん、ずいぶん張り切ってるじゃないの、どうしたの。

伊達屋 なあに、ちよいとね、金があるんだよ。

中村 なんです、結婚でもするんですか？

伊達屋 違つよ。ちよつとね。

中村 なんですかあ。なんか嬉しそうだなあ。

伊達屋 別に。

中村 教えて下さいよあ。

伊達屋 なんでもないってば。

ふたり、退場。
場転。
病院のロビー。医者を呼ぶアナウンス。
三平、登場 人待ち顔。
西崎、登場
ふたり同時に相手に気づく。
三平、にんまりとして相手に合図する。
西崎、迷っているが、諦めて三平の側に座る。

三平 … 珍しいところで会うわね。どうか悪いの？ それともお見舞い？

西崎 ちょっとね、知り合いが入院してんだよ。… そっちは？

三平 あたしはちよつとした取材。あっちこっち病院巡りよ。

西崎 病院もののルポでも書くのかい？

三平 さあどうかしら。まだ下調べの段階なの。

西崎 まだ秘密ってわけ？

三平 勘だけどね… (声をひそめる) 当たればでかいわよ。

西崎 相変わらずだな、あんたは。

三平 まあ見ててよ。絶対出し抜いてやるわ… 新聞の

西崎 (かぶせて) 新聞の奴らを、か？

三平 … (苦笑)

… 会話が途切れ、やや間があり、

三平 … ねえ、あの新聞のことなんだけど。

西崎 ん。

三平 信じてる？

西崎 うーん… 例えばこうも考えられる。伊達屋酔狂という作家がついにネタに詰って、友人たちを巻き込んで大がかりなイタズラを仕組んだ…。もちろんこの一年の顛末はあとから面白おかしく文章にされる。… どう？

三平 それならこうも考えられるわね。予備校教師・西崎陽司は、多額の借金に追われ、ついに一計を案じた。奇想天外なアイデア。乗りやすい友人たちが一年がかりでかき集めた金は横取り…。

西崎 (笑つ) そりゃオレより那智の役どころだな。あいにくオレは借金にも追われてないし。

三平 (笑つ) そうね。

西崎 まあ、考えたってしゃあないか…。

三平 … あたし調べたのよ。あれ、本物よ。

西崎 どうしてわかる？

三平 紙よ。あれ少しちぎって印刷所に持っていったの。間違いなくあの新聞の印刷に使われる紙だって。だから少なくとも紙は本物ってわけ。

西崎 …。

… サングラスで顔を隠した女(前原潤子)、登場

三平 … どうやら待ち人が来たみたい。

西崎 インタビューかい？

三平 そんなどこ。アタリだといいんだけど…。 そうだ。伊達ちゃんに会う？

西崎 ああ。
 三平 じゃ、伝えといて。あたししばらく顔出せないかもしれない。仕事の話、直接会社に行つて打ち合わせして欲しいって。
 西崎 ああ。
 三平 じゃね。

西崎、退場。
 三平、潤子に近づく。

潤子 …。
 三平 前原、潤子さんね？
 潤子 (サンングラスを外す)…三平さん？
 三平 ええ。

三平、前原を促し、ふたり退場。
 場転。
 早朝の公園。
 マリ、助手、登場。
 助手がマリを荒縄で縛っている。

助手 これ、ちよつときつくないすか？
 マリ ん、平気…。(欠伸)。眠い…。
 助手 朝の五時ですからねえ。
 マリ なんてこんな早いのに、今日。
 助手 これくらいの時間じゃないと人だかりできちやいますから。
 マリ なんの因果で朝の五時から代々木公園で縄目の恥辱受けなきゃならないのかしら…。
 助手 仕事ですからねえ。…これダイジョブすか？
 マリ ん、平気…。(ちよつと痛そう)ねえ、これ脱がなくていいの？
 助手 取り敢えず被せのままイメージ先に撮るみたいです。服、後で破いちゃうから…。
 マリ ゴーカンものなの、これって。
 助手 そうみたいです。あの、これは？
 マリ ん…へ、平気…。

助手、ぐいと縄を引っ張る。

マリ いたたたたたたたた。
 助手 あ、すいませんすいません。
 マリ だ、ダイジョブ…。しかし今時流行ないわよねえ、ビデオだのCDナントかだのが全盛のご時世に、ビニ本でSMものなんてさ…。
 助手 しかもカラミなしで単体ですからねえ。
 マリ ま、これも仕事よね。
 助手 えつと、ここ引つ張りますね。
 マリ うん、平気。…いいたたたたたたたたたた！
 助手 あ、すいませんすいません。
 マリ あんたちよつと本気入ってんじゃないの？
 助手 そんなことないつす。

マリ あんまり慣れてないのよSMものって。普段やんないから。

助手 そういえばマリさん珍しいですよね。

マリ ちょっとね、お金が要るの。SMってお金いいでしょ。

助手 最近あんまり違わないみたいですよ。…えっと、ここここを結んじゃいますね。マリ でもさ、そのちょっとした差が大きいのよ。

助手 そうですよ。えっと、それでここここを繋ぐ…と。

助手は、縛り方マニュアルみたいなメモを見ながらやっている。

一息ついて出来映えを眺める助手。

かなり複雑怪奇なことになっている。

マリ (息も絶え絶え)…ねえ、ちょっと、これホントにあってるの？

助手 こうでいいはずなんですけど。あれえ、なんか違うかなあ…。

マリ あたしに縄抜けでもしろっていつの？ ビックリ人間大集合に出るんじゃないんだからね…。

声 おーい、ちょっと手伝ってくれえ。

助手 あ、はい！ すいませんマリさん、ちょっとセティング手伝ってきます。

マリ えっ。ちょっと待ってよ。

助手 なんせ手が足りないもんで。

マリ ちょっとお！ (横倒しに倒れる) あたっ。

助手、マリをおいて足早に退場。

マリ ……んー。

マリ、唸り声をあげながら

後ろから、白い杖に黒メガネの盲人(インコ)登場。

インコ ……。

白い杖で、転がっているマリの躰をつんつんと突つく。

インコ ……？

マリ ……あ、あの、えー。

インコ あ、人でしたか。

マリ 人です人です。

インコ すいません、目が悪いもので…。

マリ どういたしました。

インコ あの、どうかなきいしましたか？ 息が荒いようですが…。

マリ いえ、あの、どうぞお気遣いなく。

インコ あのう、ここ、公園ですよ。

マリ そうですね。

インコ なんだかいつの間にか迷い込んでしまっ…。出口はどっちでしょう。

マリ 出口ですか、えーと…。

インコ あの、ここへ行きたいんですが、すみません、お分かりになりますか？

インコ、紙片を取り出す。

マリ えーと、あの、すみません、起こしていただけますか？

インコ あ、すみません、気が利かないもので…。
マリ あ、恐れ入ります。

インコ、マリを起こす。
マリ、インコの差し出す紙片を読もうとする。
インコ、辺りに人影がないのを見計らう。

マリ 渋谷区、大山、2の…これ、あたしの住所…。

インコ、ぐいとマリを引き寄せせる。

マリ あ…なによ。

インコ 高井真理子さん、だね。

マリ あんた誰！

インコ 芸名は高千穂マリって言ったっけ。あんたの写真見せてもらったが…なかなかそそるね。いい体をしているよ。

マリ なんなのあんた！ 大声出すわよ！

インコ 三平郷子、知ってるな。

マリ …。

インコ どこにいる？

マリ 知らないわよ！

インコ とぼけるんじゃない。あんたが三平の友人だってことはわかってる。三平は今どこにいる。

マリ 知らないったら！ 会ってないわ！

助手、登場。

助手 マリさん！ どうしたんですか！

インコ、マリを突き放す。

助手、マリに駆け寄る。

インコ …。

インコ、無言のまま、退場。
暗転。

ACT 4 転回

夜のバー。

それらしき音楽。

中央に西崎、離れて夏目、反対側に那智と連れれの女がスツール（回転する丸椅子）に腰掛けて飲んでいる。

西崎と夏目にはそれぞれ相手がいる様子。

西崎のみは客席向き。夏目と那智たちは客席に背を向けている。

西崎 ……どうですか最近、景気のほうはいかがですか。…まあそう焦らないでくださいよ。私とあなたは初対面だし、ね、お互いどんな人間なのか、軽いおしゃべりを楽しみながら、なんて言うか、腹の探り合いついていっんですか、なんかそういう…はあ、それじゃいきなり本題に入りますか？ 気の早い人だなあ。

（西崎はスツールごとくぐるりと回転して背を向ける。同時に夏目が回転して客席向きに。以下同じ。）

夏目 ずいぶん久しぶりじゃないか、ええ？ てつきりくたばったのかと思ってたよ。…バカヤロ。オシはまっとうな市民だろうが。税金だって納めてるぞ。納めてるね。うるせえ。そんなことはどうでもいいんだよ。おたくには貸しがあったはずだ。忘れたとは言わせないぜ。…言わせないって言うてるそばから言っんじやない！…とにかく、借りは返して貰うからな…。

那智 小さな港町の生まれでさ…。なんて言うか、夢なんだよ。……海。都会の溝ん中であくせく働いてても、いつもどっかで想ってる。体ん中にさ、あるんだよ。潮の匂いや、鷗の鳴き声、船乗り達の怒鳴り声。体の奥が騒さわついて、落ち着かなくなるんだ…。

西崎 ……もう少し落ち着いたらどうですか。…いやいや、そりゃあなたにとっちゃ、こんな場面はとっと片づけてしまいたいんでしょうがね…。添島義一さん。…いや失礼、こんなところで名前出されちゃまずいですよねえ、こりゃウツカリしてました。まま、飲んでくださいよ。ドライ・マティーニ…

夏目 とにかく情報が足りないんだ。そう、その前原潤子だよ。…おいおい惚とほけなさんなよ。胡散臭い情報ネッならなんでも来いの情報屋だろ。…足洗っただア？ 見せてみる。見せてみるよ。……しまえ。しまってくれ。いいから靴を履け。勿体ぶらずに調査結果を報告しろ。

那智 やっぱり血なのかね。いつも躰のどっかがさ、帰りがたってるんだ、あそこに。なんにもない海の上に。…いつかさ、いつか船で…ちっちゃくていいんだ、ちっちゃくても、自分の船で…なんてさ…まあ夢のまた夢だけどね。

年増女 (艶然と微笑む) そつでもないかもよ…。
 那智 …。
 年増女 ねえ、ヨットって、幾らくらいするの？

西崎 グラムで三千。…いやいや先生、よく考えてくださいよ。私はね、先生との取り引きをチビチビと小出しにするつもりはないんです。あなたが必要とおっしゃるぶんだけ、まとめてご用立てするつもりです。その値段なら、ね。そのへんのチンピラ相手にイヤな思いをして仕入れる。混ぜものだって多い。その点、多少値が張っても、私のほうは安定供給、高品質がモットーです。…よく考えてくださいよ。…よく、ね。

夏目 …つまりおたくの話を要約すると、前原潤子はひと月前に突然勤め先を辞め、消息を断った。彼女は正体不明の地下組織の一員である可能性が強い。要するにそれだけのことが。おまえなあ…。(軽く舌打ち) まあ一週間ならそんなもんか…。バカヤロ、そう簡単にチャラに出来るか。その、失踪直前に前原潤子を訪ねてきたっていう女…ミヒラ…なんだっけ？ ミヒラキョウコか、その女の素性はわかるか？…調べてくれ。分かっている範囲じゃ前原に最後に会った人間だからな。ああ。頼む。…あ、それから、おたくから預かっているクーラー、引き取る気がないんだったら処分するがいいか。それがいやなら保管料とついでに修理代を耳を揃えて…え…？ おまえじゃなかったかよ……

響め面でビールを呷る。
 相手は去る。

那智、女を連れ、店から出ようとする。
 那智、西崎に気づく。

那智 あれえ…西崎先生じゃねえの。珍しいね、こんな店で会うなんてさあ。
 西崎 …。(追い払う手振り)
 那智 なに。なに、この手は。

西崎、席を立ち、那智を隅っこに引っ張っていく。

西崎 今、取り込み中なんだよ。
 那智 あそつ。いや実はオレもね、仕事中、なの。
 西崎 そりゃあ、よかったな。がんばれよ。
 那智 あのさ、ヨットってどこ持ってたたら高く売れるかな？
 西崎 知らねえよそんなこと。なんで？
 那智 いやあ、なんていうか、海の男はそれくらい知ってないとき。
 西崎 海の男って、おまえ群馬の山奥の出身じゃねえか。
 那智 いいのいいの、そういう細かいことは。
 西崎 また口クでもないこと考えてやがんな…。
 那智 お互い様じゃないの。あ、そうだ、最近サンペー師匠に会ったか？
 西崎 えっ…死んだんじゃないかったっけ？

那智 誰が本物の話してんだよ！ 三平郷子サンだよ。
 西崎 ああ、そういや先週チラツと会ったけど…。
 那智 伊達ちゃんが探してんだ、連絡取れないんだってよ。
 西崎 あれ以来会ってねえな。なんか忙しそうだったぜ。…ホラ、仕事しろ。
 那智 ん。じゃ、また。
 西崎 ああ。

那智、女のほうへ戻る。

那智 ごめんよ。ちよつと知り合いだったから。

那智、女とともに退場。
 西崎、もとの席へ戻る。

西崎 どうも失礼…。で、話の続きですが…。そうですか。…わかりました。ええ、連絡は私のほうから。商談成立ですね。(握手は拒否される)…それじゃ。

西崎、退場。
 夏目、酒を飲み干し、西崎を追って退場。
 暗転。

外。

那智と年増女、登場。
 年増女、那智と別れ、退場。

那智、さっそく手帳を出してメモる。
 西崎、登場。那智の後ろからのぞき込む。

那智 (西崎に気づいて) うわっ…！

西崎 なにやっつてんだ、おまえ。

那智 いや別になんでも。

西崎 なんだよその「船・ゲット」っていつの。

那智 いいんだよ、なんでもないので。

西崎 ハートマークついてんぞそれ。

那智 うるせえな、企業秘密だよ！

西崎 またそうやってロクでもねえことばかり。

那智 だからお互い様だって言ってるの。そっちはどうなんだよ。見るからに怪しげな雰囲気だったじゃないの。

西崎 んー、まあな。お得意さまひとりゲットって感じ。

那智 ハートマーク？

西崎 (ニヤリと笑って) ドクロマーク。

那智 なんだかなあ。じゃあまあ、お互い上首尾ってことで、一杯やっつか？

西崎 そうだな。飲み直すか…。

インコ、登場。

インコ それは駄目だな。今夜はちよつと野暮用があるでな。

那智・西崎 …。

インコ ちよつと聞きたいことがある。一緒に来てもらおう。

西崎 知り合い？

インコ (杖で指しながら) 那智健二。それから西崎陽司だな。

那智 向こうは知ってるみたい。

インコ 三平郷子、知ってるな。

那智・西崎 …。

インコ どこにいる。なにか連絡は？

那智 知らねえよ！

夏目、カッラをかぶって登場。

夏目 ああ、ちよっと、あなたたちお元気？

那智・西崎・インコ …。

夏目 なにさなにさ男三人暗がりて寄ってたかっしてお楽しみ真っ最中？ いいわねいわね、ちよっと、あたしも混ぜてちよっただいよ。紅一点よ紅一点。紅一点の口ウは肛門の肛じゃないのよ。あたしなに言ってるの？ やあねえもう。

那智・西崎・インコ …。

夏目 それにしてもあなたたちずいぶんお見限りじゃないの。今夜は逃がさないんだから。お店来てちよっただい。あらあ、こちら新顔。ちよっとセクシーな感じじゃない？ あらよくみると可愛いお目々。いいわあ、あたしのタイプって感じ。可愛い小鳥ちゃん。お名刺下さらない？

インコ …。

インコ、夏目の手を払いのけて、退場。

夏目、カッラを外してふたりを振り返る。

夏目 …まあそついったわけで。

那智・西崎 …。(ほし然)

夏目、名刺を那智に渡す。

夏目 よろしければちよっとお話を。…ええそうです。お友達の三平郷子さんのこと
でね…。

那智、西崎、顔を見合わせる。
暗転。

ACT 5 搜索

単調な電子の心音。

「美由紀」の病室。

西崎がいる。

「美由紀」がいると思われる場所に明かりが当たっているが、「美由紀」はいない。

西崎 : それでそのオカマっていうのは結局私立探偵でさ、そいつが言うには、三平郷子は厄介な連中に目をつけられて、消される可能性があるって。…消される、だぜ。笑っちゃっただる。消されるってどっいつんだよなあ。伊達の書いてる漫画の原作じゃあるまいし。…でも探偵はマジだったんだ。たぶん彼女は、なにかでっかいスキャンダルのネタをつかんだんだと思う。それを追っかけて危ない連中に狙われたってわけさ。…わからないのは、彼女がいったいなにを嗅ぎ当たってたかってことなんだ。おれにも伊達にもなにも言っってなかったし、全然見当つかないんだよ。…だからおれたちは探偵に言っただ。なにかわかったら教えて欲しいって。おれたちのほうも、なにかわかったらヤツのところに電話するってさ。…なあ、美由紀。…あいつ、いったいどこいつちまっただらうなあ…。

西崎退場。

伊達の部屋。

伊達、マリ、那智、登場。

伊達屋 : じゃあそのマリちゃんを襲ったメクラの男ってのは、なっちゃんここに来たのと同じヤツなわけだな。

マリ : うん。白い杖ついて、黒メガネ掛けてた。

伊達屋 : で、三平郷子はどこにいるって、そう聞いたんだな。

那智 : あと、なにか連絡はないかって。

マリ : なんてそんな危ないことに足突っ込んだじゃったのかしら。

伊達屋 : さあなあ。あいつの場合性格かなあ…。

那智 : 危ない性格だから…。

伊達屋 : なんつーか、俺たちのなかじゃ、いつちゃん上昇志向が強いからなあ。なんだかこう、踏み込んだじゃいけない世界にすっかり勇み足を踏み込んだじゃったのかもなあ…。

那智 : 踏み込んだじゃいけない世界ってなんだらうな。

マリ : …切手収集の世界とか。(笑)

伊達屋 : 鉄道模型の世界とか。(笑)

那智 : そうじゃないだろ！…野鳥観察の世界とか。(爆笑)

伊達屋 : (笑いながら) 突っ込むかボケるかどっちかにしろよ。

マリ : けどさ、あたしたちにまでその踏み込んだじゃいけない世界の魔の手が迫ってるわけよ。ボケてるだけじゃ…

伊達屋 : ボケてるだけじゃ物足りない、じゃなくて申し訳ない、じゃなくて…「こういふときなんて言うんだらうな。

那智 : ボケてるだけじゃ能がない。

伊達屋 : それだ。

マリ : 考えなさいよ。なんか思い当たるフシはないの？

伊達屋 思い当たるフシねえ。…フシってなんだろうな？
 那智 フシはフシだろ。

伊達屋 体のフシフシが痛い！…とか。なんの話してるんだ？

マリ ねえ、彼女まさか例のレースの資金稼ぎのために、なんか危ないことを…
 伊達 それはないと思うけど…

那智 だって師匠が自分で言ってたんだぜ、危ない橋を渡ってまで金を作ろうとしないこと…って。

伊達屋 あいつは金よりもでかい事件をものにして名を売るほうを選ぶやつだからな。
 マリ でもこの新聞のことがあってから彼女はすぐ姿を消しちゃったわけだし、なんか関係があったっておかしくないわ。違うかしら？

那智 どうかな…。

伊達屋 こいつのことはその夏目って探偵には喋ってないだろうな。

那智 うん、言っていないよ。

伊達、マリが新聞の切れ端を見ている様子を眺めているが、ハツとして新聞紙を奪う。

伊達屋 …。

那智 なんだよ。

伊達屋 …そうか、わかったぞ…。あいつ、これを見たんだ…。

那智 なにが。

伊達屋 なつちゃん、その探偵に連絡とれるか？（新聞を渡す）

那智 ああ。

伊達屋 電話してくれ。すぐだ。

那智 （新聞を見て気づいた様子）わかった。

那智、部屋の奥へ退場。

伊達屋 マリちゃん、このへんで電話帳のおいてある電話ボックス知ってるか？

マリ 電話帳？ ええと確か駅前に…

伊達屋 案内してくれ。おれんち電話帳ないんだ。

マリ 電話帳なんかどうするの？

伊達屋 いいから早く！

伊達屋、マリを引っ張って退場。

探偵事務所。

田島、登場

夏目、登場

田島 おかえりなさいませ。

夏目 なにかあるかい？

田島 小暮さまとおっしゃる方からFAXが入ってます。あとは電話代の請求、国民年金の請求、飲み屋のツケの請求…

夏目 神棚にでも奉^{まう}つとけ。FAXはどこだ。

田島 これです。

田島、用紙を渡す。

夏目 ああ、やっぱりそうだ、こいつだ。

田島 なんですの？

夏目 三平郷子の知り合いのまわりをウロチョロしてる男。通称セキセイインコっていう、右翼系の何でも屋だ。

田島 可愛らしい仇名ですこと。

夏目 危つく目玉つつかれそうになったがね。

田島 やっぱり政治絡みですかね。

夏目 どうかな。とにかく女がふたり消えてる。元看護婦の前原潤子。雑誌記者の三平郷子。三平を探しているのは厄介な荒事師。前原を捜し出せと頼んできたのは…
そうそう、あれ、どうだった？

田島 手に入りました。(書類を示す)前原潤子の勤め先の職員名簿です。

夏目 で？

田島 ありました。依頼人本郷幹生氏は確かに前原さんの同僚ですね。

夏目 元同僚だ。前原潤子は辞めてる。

田島 でも彼女も載ってますよ。

夏目 載ってる？

田島 ええ。

夏目、名簿を見る。

夏目 …。

田島 あの、所長。…所長。

夏目 くん？

田島 熱心に仕事なさるのはけっこうなんですけど、私はただの事務員ですから、探偵助手のような作業は今後…

夏目 ああ、わかったよ。君をポケット小僧扱いしたのは悪かった。

田島 ポケット…なんですって？

夏目 ジェネレーション・ギャップだ。忘れてくれ。じゃあでかけてくるから…

田島 くれぐれも危険なことにはなさないように。それから…

夏目 おやすみ。

夏目、退場。

電話が鳴る。

田島 はい、夏目探偵局でございます。…(ラジオのヴォリューム上げる)はい。生憎、夏目はたった今外出いたしました…はい。那智さま、ですね。はい。…は？…フシ？…ああ、思い当たるフシですか？…はあ、(メモを取る)はい、はい、アシザワ脳神経外科…わかりました。申し伝えます。はい。御免下さいませ。

田島、電話を切り、退場。

伊達の部屋。

電話帳を持った伊達、マリ、登場。

伊達屋 あさ…あし…あしだ…あしかわ…あしざわ…あつたぞ、これだ。

那智、部屋の奥から登場。

那智 探偵は留守だった、一心伝言頼んだけど。あつたか？

伊達屋 ばっちりだ。

マリ　ねえ、どういうことなのよ、教えてよ。

那智　これだよ。(新聞を渡す)

マリ　…なによ、わかんないわよこれじゃ。

那智　サンペー師匠になったつもりで、よく眺めてみなよ。

那智、マリの手にした新聞を裏返しにしてやる。

マリ　あ…。

那智　わかった？

マリ　これ…じゃあサンちゃんは…

チャイムの音。

伊達が反射的にドアのほうに歩く。

那智　伊達ちゃん！

伊達屋　…なんだよ。

那智　まさかとは思っただけど…。

那智、黒メガネに杖のマネをする。

伊達屋　…まさか…。

と、いいつつ身が引ける伊達。

三人、部屋の隅まで行って固まっている。

マリ　…ねえ、覗いてみたら？

那智　うん…おまえ、それ隠しとけよ…。

那智、そろそろとドアのほうへ。

伊達屋　ちょっと待て那智。(マリに)おれたち、入ってきたとき、鍵かけた？

マリ　…(首を横に振る)

ドアの開く音が響く。

ビクリとする三人。

西崎、登場。

西崎　イエーイ。

三人、フニヤフニヤになる。

伊達屋　齧かすな、バカっ！

西崎　バカとはなんだバカとは。おれはな、おまえのファンを案内してきてやったんだぞ。

伊達屋　ファン？

西崎　しょうがねえだろ、どうしても会いたっていうんだから。

西崎の後ろから、西崎に杖を突きつけたインコ、登場。

三人、再び立ち上がって硬直。

西崎　…ごめんな。

伊達屋　バカヤロ、なんちゅうことすんだ。

インコ、西崎を突き飛ばす。

西崎　しょうがねえだろ！

インコ　お揃いだったな。手間が省けてありがたい。ま、突っ立ってないで座ったらどうかね。と言っても椅子が足らないようだが。

伊達屋　招かれざる客にあてがう椅子はないんだよ。

インコ　そういう強がりと言つと後悔することになるよ。ま、とにかく…

インコ、中央の椅子にどっかりと腰を下ろす。

インコ　始めようか。順を追ってな…。

暗転。

ACT 6 監禁1

どことも知れぬ地下室。

三平がいる。

前原潤子、食事のトレイを持って登場。

三平 いつまで閉じこめておくつもり。

潤子 …。

三平 ここはどこなのよ。

潤子 食べないとダメよ。

三平 …。

三平、潤子を睨んでいるが、食器を取って旺盛な食欲を見せる。

潤子 (笑って) その調子なら大丈夫そうね。

三平 …どうせ説明してもらえないんでしょう。あたしの想像で喋らせてもらうわ。あなたたちは黒崎に雇われてるんでしょう。あたしがつかんだネタをもみ消すために働いてるんでしょう。無駄よ。あたしには仲間がいるもの。あたしを消してごらんなさい。仲間が黙ってないわ。

潤子 …。

三平 ハツタリだと思ってるんでしょう。でももし本当だったら？ あのことが公表されれば、どんな権力を持つていようが、黒崎はおしまい。だからあたしを消す決心がつかない。そうでしょう？

潤子 …。

三平 お生憎様ね。本当のことが知りたきゃあたしを消しなさい。そうすればわかるわ。そうでしょ、前原潤子さん。

潤子 …スパイ映画なんかでね、敵に捕まった一匹狼の主人公が決まってそういうふう脅すの。あなたが一週間以内に仲間と連絡しないと自動的に秘密の書類が新聞社に郵送されるってわけ？

三平 そうだと言ったら信じるの？

潤子 さあ、どうかしら…。ねえ、どうしてあたしに会いに来たの？

三平 …。

潤子 あなたあの時言ったわね。三年前、芦沢病院に入院していたタケモトっていう患者のことで、なにか知ってることはないかって。

三平 …。

潤子 三年前からあたしがあそこに行ったことをあなたは知ってた。竹本卓すくもの名前まで。…たいした調査能力ね。あなた、雑誌記者なんでしょう？

三平 …そうよ。

潤子 どうしてあれを記事にしたいの？ 悪いことだから？ 権力を持った人たちが必死に隠そうとしてることだから？

三平 悪いことかどうかはあたしの記事を読んだ人が決めればいいことよ。少なくとも

潤子 あれは法律に違反してるわ、三年前も、今でも。悪くすれば殺人よ。違っ？でも、あなた自身の意見は？

三平 別に正義感を振り回すつもりはないわ。あたしが記者だからじぶんの追っかけてることに拘こたわる、それだけよ。

潤子 仲間は本当にいるの？

三平 知りたい？

潤子 知りたいわ。

三平 それが本音よね。

潤子 でもね、もしそれが本当でも、この事件は公表されないわ。…あなただって知ってるでしょ。新聞には載せていい記事とそうじゃない記事があるってこと。

三平 そう言いながらあんたたちはあたしを閉じこめておくだけでなにもしようとしてない。それがわからないわ。どうしてよ？ 本当にマスキングを抑えるだけの力があるならさっさとあたしを消せば済むことでしょ。

潤子 知りたい？

三平 知りたいわね。

潤子 もちろん教えてあげるわ。…もう少し経ったらね。(トreyを持って去りかけ) …ひとつだけ教えてあげる。

三平 …。

潤子 あたしもいたのよ、あの時。…三年前、竹本卓が死んだときに。

三平 …。

潤子 オペに立ち会ったの、看護婦としてね。

三平 …。

潤子、微笑んで退場。

三平、ひとり残される。

暗転。

ACT 7 美由紀

暗闇の中、西崎の声がする。

西崎 伊達！ おい、伊達！ しっかりしろ！

明るくなる。

伊達の部屋。

ナイフを胸に突き立てたインコの死体。

それを運びうとしている西崎と那智

ぼう然と座り込んでいる伊達。

西崎 伊達！ 足持ってくれ足！

那智 おれがやるよ。

西崎と那智、インコの死体をトイレに押し込む。

西崎 伊達！ シャンとしろ！ やっちまったもんはしょうがねえんだ！

伊達屋 …おれ…おれがやったんだよな…確かに、この手で…

西崎 いいか伊達よく聞け。これからおれがある男に電話する。その男はただのチンピラだが、そいつがまたある男に電話してくれる。その男は…というところのペロだ。金さえ払えば死体のひとつやふたつあつという間に始末してくれる。

伊達屋 西崎、おまえ、なに言ってた…

西崎 いいから言つとおりにしる。悪いようにはしないから。

伊達屋 おれは…

那智 ちよつと待てよ先生。そりゃちよいとヤバいんじゃないのか。

西崎 おまえは黙つてろ。

那智 おれも片付け屋のことは聞いたことあるけどな。あいつらシロウト相手だと骨までしゃぶるんだぜ。金払ってはいさよつならつてわけにいくのか？ だいたい先生、あんたなんでそんなコネもってんだよ。ヤー公の教え子でもいるのか？

西崎 おまえには関係ねえよ。

那智 大ありだよ。おれは巻き添えはごめんだ。

西崎 おまえ伊達を見殺しにするのか！

那智 そんなこと言つてねえだろ！ おれはあんたがなんでそんなやつらとつき合いがあるのか知りたいって言つてんだよ！

西崎 おまえに関係ねえって言つてんだ！

伊達屋 やめてくれ！…おれは…おれは…自首する。

那智 伊達ちゃん。

西崎 おまえ本気か。

伊達屋 おれはおまえらとは違つんだよ。平凡な売文業者なんだ。表の世界の片隅に居場所をもらつてあくせく暮らしてる小市民なんだよ！ おまえらにはついていけないよ。

那智 …伊達ちゃん、おれたちちゃんと証言するから。

伊達屋 …サンキュー。

西崎 おれはいなかったことにしてもらつぜ。…と言いたところだが…しょうがねえな。ひとりよりふたりのほうが真実味があるかもな。

伊達屋 無理すんなよ。おまえ、ヤバインじゃないのか。
那智 スネが傷だらけだからなあ。
西崎 人のこと言えんのか。

三人、笑い出す。
トイレから血まみれのインコ、ナイフを持って登場

那智 わあっ！

西崎、刺されて倒れる。
インコ、伊達に襲いかかる。
伊達、刺される。

伊達屋 ……ポ…ポン…ジヨビ…！！（ガクリ）
那智 な、なんだ、おまえは…！

インコ、那智に覆い被さる。
那智、椅子の上に仰向けに倒れる。
ナイフを振りかざす。

那智 おわあっ！

暗転。
暗闇で飛び起きる那智。
あたりは闇。
「美由紀」が座っている。

那智 はあ…はあ…びっくりした…。

美由紀 こんな話？

那智 へ？ あ、師匠…？

美由紀 ボンジョビ星人の話って、こんなお話？

那智 ……あんた誰だ…。

美由紀 あたし？ あたしは、美由紀。

那智 みゆき…

あたりが明るくなる。
インコ、伊達、西崎の死体がゆっくり起きあがり、ふらふらと那智に向かって歩いてくる。
美由紀がくすくす笑う。

那智 わ…待て…待てよ…わあああ…。

死体達が那智に覆い被さり、那智の姿見えなくなる。
暗転。

目覚まし時計の音。那智がうなざれている声。
那智の叫び声とともに明かり。
ゆづ子の部屋で那智が跳ね起きる。

那智 はあ…はあ…あまびっくりした…。

ゆづ子、登場。

ゆづ子 おはよう。

那智 ああ…。何時だ…(ゆづ子、目覚まし時計を見せる)…ああ、十時か…。

ゆづ子 ねえ、夕べのことおぼえてる？

那智 タベ？ ああ、おまえ凄く声出したよなあ。

ゆづ子 出してないわよ！ どうしてそういつつと言っわけ？ そうじゃないの。健二さま、もの凄く酔ってたでしょ。

那智 ああ、そう言やあ…

ゆづ子 あたしびっくりしちゃった。あたしがベッドに引っ張り上げたんだよ、健二のこと。

那智 そうか。…もう出かせなきゃ。約束があるんだ。

ドアの開く音。

修二、登場。

那智 なんだおまえ。

修二 お取り込み中悪いね。荷物を取りにきたんだ。

ゆづ子 あんた、合鍵持ってたのね！ 返してよ！

修二 怒鳴らなくてももいいだろ。ホラ。

修二、鍵を放る。

修二 ずいぶん片付いちまつてるけど、オレの荷物はどこだよ、ええ？

ゆづ子 ……その奥よ。

修二 ……。

那智と睨み合う修二。

修二 あんたがこいつの新しい男ってわけか。…いつまで保つのかな。オレは半年我慢したけどもううんざりだ。

ゆづ子 やめてよ！

修二 おまえも手回がいいな。参ったよ実際。

ゆづ子 なんだあんたにそんなこと言われなきゃいけないのよ！

修二 あっという間にお代わりを捕まえて一安心してところか？ ええ？

ゆづ子 ふざけたこと言っんじゃないわよ…！

那智 まあちよつと落ち着けよ。

ゆづ子 健二、こんなやつと言っこと真に受けないで。

那智 わかってるよ。この兄さんだってそりゃ業腹だろう。首尾よく別れた方がいいが、かわりの女が順番待ちしてるっていつほどのツラじゃなし、頭を撫で撫でてもらいたくて戻ってきてみりゃこのザマじゃ、格好がつかないってもんだ。

修二 なんだこの野郎…

那智 ああいいよ、わかったよ、口きくな。「てめえ気取りやがって何様のつもりだ、どうせ振られたばかりの女に甘いセリフ並べ立てて転がり込んだらう、偉そうな口きくんじゃねえ！」「…だいたいそんなところだろう？ 他になにか思いついたら言ってみな。

修二 ……。

那智 どうした？ オリジナリティを疑われるぜ。

修二 この野郎！

修二、那智に飛びかかる。
一方的にやられる那智。
ゆう子、悲鳴を上げてとめる。

ゆう子 やめて！ やめてったらー！

修二、ゆう子を振りほどいて立ち上がり、無言で出ていく。

ゆう子 バカヤロー！ 二度と来るな！

修二、戻ってくる。

修二 ……。

ゆう子 なによー！

ゆう子、毅然と立ち上がる。

修二、なにか言いたげな素振りを見せるが、無言で出ていく。

ゆう子 だいじょうぶ、健二…！

那智 なんでもないよ…だいじょうぶ…。

ゆう子 ごめん、ごめん…。

那智 おまえがあやまることじゃないさ。…おれ、でかけるわ。ゆう子、コレ(金)頼むわ。

ゆう子、黙って金の入った封筒を渡す。

ゆう子 ……だいじょうぶ？

那智 だいじょうぶじゃない…死ぬかもしれない。

ゆう子 ごめん、ごめん…。

那智 おまえがあやまることじゃない。…けどな、ひとつだけわかって欲しいことがあるんだ…。

ゆう子 なに？

那智 おれとあいつは違うぜ。

ゆう子 わかってる。わかってるよ、そんなこと。

那智 おれは嘔吐きでチャランポランで、世間から見りゃあの兄ちゃんと同類だろうと思っよ。でもな、おまえにだけはわかって欲しいんだよ、うまく言えないけど…

ゆう子 ……うん。

那智 おまえが好きだからここにいるんだ、おれ。

ゆう子 ……。

那智をぎゅっ抱きしめるゆう子。

ゆう子の背中でそっと封筒をのぞき込む那智。

那智 ……行くわ。

ゆう子 うん…待ってる。戻ってきて。

那智 ……。

那智、退場。

ゆう子、退場。

外。
伊達、登場
那智、登場

伊達屋
よ。

那智 …（封筒をヒラヒラ）。

伊達屋 いい腕だねえ、相変わらず。

那智 この道一年だもん。

伊達屋 まだいけますか。

那智 ここでスッパリ撤退するのがコツ。

伊達屋 後ろ髪引かれるだろ。

那智 待ってる、戻ってきて、と来たもんだ。

伊達屋 戻ってやればいいじゃない。

那智 ジジイになったらな。西崎先生は？

伊達屋 仕事場だ。タクシー拾おうぜ。

那智 電車電車。

二人、退場。

予備校。

西崎、登場

追って桑田、登場。

桑田 西崎さん！

西崎 ん！。

桑田 …ちよつとマズイことになっちゃったんですよ…。

西崎 そーか、そりゃマズイじゃないかっ、それでいったいどうしたって言うんだ。

桑田 例の父兄、西崎さんに紹介した…

西崎 添島義一さんだ。

桑田 そう、その添島さんがね、パクられちゃったんですよ！

西崎 なにイ！ それは大変だっ！ それではごきげんよう。

西崎、去りかける。

桑田 ちよちよちよちよ！…西崎さん！

西崎 （うるさそうに）なんだい。

桑田 なに落ち着いてるんですか。僕の言ったことわかんなかったんですか？ 添島さんがねえ…

西崎 ウンウン。

桑田 西崎さん、ふざけてる場合じゃないでしょう！ 添島義一があ…

西崎 麻薬取締法違反で警察に連れて行かれちゃったんだね？

桑田 そうだよ、そう！

西崎 声大きいよ。それじゃそういうことで。ハハハハハ…

西崎、高笑いとともに退場。

桑田 西崎さん！ 添島にヤク売ったんだろ？ あんただってヤバイんだよ！ わかってんのか！ おい！ おーい！

桑田、追って退場。

外。
那智、伊達屋、登場。
西崎、登場。

西崎 うーす。

伊達屋 終わったか？ じゃ、行こうか。

西崎 場所はわかったのかね？

伊達屋 ああ、けっこう近いんだ。

那智 こつからだどJRでいけるよ。

西崎 タクシータクシー。

西崎、タクシーをとめる。

運転手、ハンドルを持って登場。

三人、乗り込む。

伊達屋 芦沢脳神経外科病院。

タクシー、走り出す。

西崎 (例の新聞を見ている)なるほどねえ…。

伊達屋 芦沢病院事件で証人喚問か…ってところで千切れてるだろ。

那智 師匠はそれに目をつけたんだよ。それで調べはじめてやばい話に巻き込まれたんだ。

伊達屋 これから一年の間に、政府が証人喚問するようなデカイ事件が起こる。それを先にスッパ抜こう、あいづらい発想だよな。

那智 (窓の外) おっ、いい女。

西崎 マリちゃんはどっしてるんだ？

伊達屋 取り敢えず知り合いのところに行くってよ。おそらくおれたちの家は全部、そのメクラの男に知られてるだろ。

西崎 やれやれ、厄介な…。

タクシー停まる。

運転手 千七百五十円す。

那智、封筒から払う。

三人、タクシーから降り、運転手、ハンドルを持って退場。

那智 ……ここか…。(見上げる)

伊達屋 (見上げる)……けっこうでかいじゃないか。

西崎 (見上げる) けっこうどころか、大病院だぜ、これ。建物は古いけど…。

伊達屋 取り敢えず来たな。

西崎 来てどうなるの？ ってか。

伊達屋 よくわからんが、それしか手がかりはない。いくぜい。

那智 おっ。さっきのいい女。

西崎 早くこい。

三人、退場。
暗転。

ACT 8 監禁2

地下室。
三平がいる。
潤子、登場。

三平 … 今日も帰してもらえそうにないわね。

潤子 残念だけどね。

三平 ねえ、ずっと考えてるんだけど…。

潤子 なに？

三平 あたしね、芦沢病院の職員名簿を見たのよ。… 病院に三年以上勤めてる職員に当たって行くつもりだった。それであなたに会いに行ったの。

潤子 …。

三平 でもあなたは芦沢にいなかった。名簿に乗っているのに、あそこを辞めていた…。病院の事務では曖昧なこと言ってたけど、ピンと来たわ。あなた、誰にも知らせずにいきなりあそこを辞めたのね。違う？

潤子 それで…？

三平 あなた、三年前のオベに立ち会ったって言ったわよね。… ということは、事件の真相を知ってる数少ない人間のひとりってわけ。そのあなたが、突然病院を辞めた。病院では原住所さえわからない…。おかしくない？

潤子 …。

三平 あたしを軟禁しておいて、そのくせなにかを聞き出そうとするでもない。乱暴にも扱わない。ただ閉じこめておくだけ。なぜ？

潤子 …。

三平 もしかして、もしかしてよ。これはあたしの想像。三年前あの病院で起きたことには大きな権力が働いている。関係者は口裏を合わせて、コトが公にならないようなシステムを作っている。でも、もし一握りの人間が、それを破壊しようとしたら？ 真相を知っている内部の人間が、事実を公表するために動いているとしたら？

潤子 … そう。… やっぱりあなた、優秀な記者ね。

三平 …。

潤子 … あれは立派な殺人よ。あの時の関係者はみんな知ってる。患者が… 竹本卓が蘇生する可能性は充分にあったのよ。でも、殺した。… 黒崎の指示で。

三平 …。

潤子 … 誰も本当のことは言わない。言えない。結局、ふたりの人間が死んだだけ…。

三平 … どうしてあたしを閉じこめておくの？

潤子 … 閉じこめてるんじゃない。護ってるのよ。あなたが嗅ぎまわってるってことは、もうみんな知ってるわ。だからあたしはあの病院を辞めて、あなたと接触したの。あたしの仲間たちはとめたけど…。あなたが消される前に、あなたを保護したかった。

三平 なぜ？

潤子 … 別にあたしも正義感を振り回すつもりはないわ。でも、これ以上人が死ぬのを黙って見過ごせなかったのもホント。

三平 …。

潤子 それにね、証拠があるの。あの時の資料は全部処分されたけど、ひとつだけ残ってるの。決定的な証拠。

三平 それをあなたが持つてるの？

潤子 ええ。もしそれを公開できるルートがあれば、その時にはジャーナリストが必要になる。

三平 それを…あたしに？

潤子 あなた、ガッツがあるもの。断りたければそれでもいいけど。

三平 …ここは本当に安全なの？

潤子 安全なところなんてどこにもないけど、まあ比較的マシなほうね。…もうしばらく辛抱して。

三平 ねえ、ひとつだけ聞かせて。あなたの仲間はこのことを知ってるの？

潤子 他の仲間みんな反対したって言ったでしょ？ あたしはひとりよ。…あなたと同じにね。

潤子、退場。
暗転。

ACT 9 院長

芦沢病院。

伊達屋、那智、西崎が座っている。

芦沢院長、登場。

院長 芦沢です。

三人、唐突な登場にびっくりする。

伊達屋 どうも突然お邪魔しまして…。

院長 いやいやいや、なんですか昨今はいろいろな分野に材を採ってものを書かれていますかが増えたのでしょうか？ いやいや私なんかはいたって不勉強でものを書くどころか読む根気も薄れてしまっているような有り様で。まあまあまあお楽にお楽に。

伊達屋 えー、そのですね、こちらの建物はかなり由緒正しいものとお見受けしますが…。

院長 いやいやいやいやいやもつこれは老朽化しておりましてなお恥ずかしい。明治三十年。いやいやいやもつ古いだけでその名のあるものではございませんよ。実は新館を建設中でした。ええそれがあなたお恥ずかしい話昨今の不景気で工事を中断しております。ええ工中断です中断。決して中止ではない。打ち切り。などということもありません。ええ、ありませんとも。それでまあ、なんのお話でしたか、あー…

伊達屋 え、と、歴史がおりになる…

院長 あいやいやいや歴史と言つにはあまりにも僭越でした。しかしま多少のものはまあそれなりに、と申しましようか。なんですか昨今は当世風とでも申しますんでしようか前衛的な建築物などをあちらこちらで目にするわけですが、まあまあまあ私なんかはもう難解の一語に戻きるといふか、ええ工工ええ目から鱗が落ちると申し上げればよろしいんでしようか、なんと申し上げればよろしいんでしようか、よくわからないつ、ああいう建築物の良さ、とでもいうものは、まあ私のような凡夫の悲しさとも申しましようか、よくわかりませんのです、はい。

院長の饒舌に唾然としている三人。

那智 ……どうしたんだ。

西崎 知らん。

伊達屋 えー、なるほど。ところで話は変わりますが…

院長 はあはあはあ。

伊達屋 ……最近はこの、人間の脳に関する研究もだいぶ進んでいるようですが…

院長 あつ、あつ、脳。脳ですか。はあ、脳につきましてはわたくしどもこう申し上げてはなんですが一日の長があるかと。まあまあいわゆる人間の脳。ええ工工、ブレイン。ええ。勉強しております。きわめて重要です。ええ。遅く生きる本能の心。とでも申し上げればいいのか、どうか。よい。と私は考えております。常々そう皆のものにも申し伝えておるわけで。ええ、朝礼などです。ええ、朝礼ですね。八時十五分から。去年の冬からでしたか、なんと申すんでしよう、あのフラックス、ええ、フレックスタイムとでも申し上げたらよろしいんでしょ

うか、それをやっておりますが、朝礼は七時十五分と決めておるわけでして。ええ。あつ、あつ、わたくし今七時十五分と申し上げたような気がつ。八時です。八時十五分。

伊達 (困惑のきわみ) その…こういった取材なんかもたまにあるんでしょっね…

院長 ございますとも。ええ。科学雑誌。いわゆる、いわゆるニユートン。そしてアイシユタイン。日経サイエンスとでも申し上げたらよろしいんでしょっか。そして医学。当然のことながら医学関係の雑誌など、まあまあ、実に多彩な。ええ。あつ。クオークでしたか。なんでしたか。ウオークでしたか。いやクオーツ。ええ。ええ。いやクオーター。あつ。あつ。クオート…

伊達屋 あのですね！ これは取材とあまり関係ないんですが、三平郷子という雑誌記者がこちらに取材にうかがいませんでしたかね。

院長、沈黙する。

伊達屋 あの…

院長、凍りついたように停止している。

伊達屋 …。

那智 壊れたか？

西崎 激烈なりアクションだな。

銃を持った男、登場。

伊達屋 っわ。

那智 出たあ。

伊達屋 …俺たちはなにも知らない。って言っても駄目なんだろうっね…。

院長 …取り敢えず新館にお連れしなさい。あそこなら誰もこない。誰もね。

三人、男に促されて退場。

院長 (携帯電話をかけて) 芦沢だ。三人おさえた。あとは女がひとり。それと一番肝心な三平郷子だ。三平が見つからない以上、消すわけにはいかん。…うん。三平が見つかり次第全員消す。

院長、退場。

ACT 10 美由紀2

助手の部屋。

マリ、登場。

背後に美由紀、登場。

マリ (気配を感じて振り向く) …師匠！ なんで…みんな探してる…。
美由紀 そんなに似ているのかしら…。

マリ なに言ってるの？

美由紀 わたし、三平郷子っていう人じゃないわ。でもよく似ているらしいわね。
マリ 嘘でしょ？

美由紀 ホント。

マリ ホントに師匠じゃないの？

美由紀 美由紀っていうの。あなた、高井真理子さんでしょ。

マリ (はっとして) …どっから入ったの？ だって窓閉まってるし、鍵も…

美由紀 ああ、落ち着いて。だいたいぶ、なにもしないわ。

マリ なにもしないって、鍵の掛かった部屋にいきなり現れたり、なんかするのが礼儀
じゃない！ なんの目的もなくそんなことする？

美由紀 現れてないわ。

マリ あらわれてるじゃないよ！

美由紀 わたしはいないの。本当はね、別の場所で眠っているの。

マリ …っーん。

美由紀 自分でも不思議。気がつくとわたしはどこにでもいる。すべての場所にいるよ
うになっていたの。どこにでもいて、どこにもいないの。

マリ 信じろって言うの、それ。

美由紀 ううん、どっちでも。

マリ …あたしって、あなたの夢の登場人物？

美由紀 そんなこと言ってるわいよ。あなたはそこにいるじゃない。

マリ どうしてあたしの名前知ってるの？

美由紀 教えてくれたの、ある人が。

マリ ある人？

美由紀 その人とね、結婚したの。

マリ あ、人妻なんだ。

美由紀 そうなの。その人は毎日のようにやってきては、いろんなことを話してくれ
るの。

マリ やってきて…？ だって結婚してるんでしょ？

美由紀 でもね、いつしよには住めないの。

マリ ふうん。…なんだか可哀相ね。

美由紀 そんなことないのよ。わたしはしあわせだと思っわ。でも…あの人のことはと
きどき可哀相になるわ。

マリ どうして？

美由紀 わたしがしあわせかどうか、わたしがいしあわせだと思っわ。あの人は
には伝わらないから。

マリ 言っただけじゃいいじゃない。

美由紀 できないのよ。それはできないの。

マリ あたしが言っただけ。

美由紀 ありがとう。マリちゃん。

マリ その人、どこにいるの？ なんて言う人？ あたしの知ってる人？

美由紀 その人はね…

助手、登場。

助手 マリさん！ イチゴ大福買ってきましたあ！

マリ あ、ありがとう…

振り返ると美由紀はいない。

マリ …。

助手 どうしたんです？

マリ …なんでも…ない…。

助手 心配なんですよ。

マリ そう…そうね。

助手 だいじょうぶですよ、きつと。

マリ …今日はどこまでいったやら、よ。

助手、マリ、退場。

ACT 11 新館

芦沢病院新館一階。
伊達、那智、西崎、登場。

西崎 どうする。

伊達屋 さあ…。

西崎 ドア開かないか？

伊達屋 まさか。

那智 ドアぶち破って飛び出してみようか。

西崎 それで警官隊に蜂の巣にされるとか？

伊達屋 なんだそりゃ、「明日に向かって撃て」か？

西崎 ストップモーションで終われりゃいいけどな。

那智 でも隣が病院だからすぐ担ぎ込まれて助かるかも…

伊達屋 その病院が丸ごと俺たちの敵なんじゃねえか。

那智 医者の不養生とはよく言ったもんだ。

西崎 おまえだけだ、そんな訳のわからん使い方するのは。

前原潤子、登場。

伊達屋 …誰だ！

潤子 …。

潤子の後ろから、三平、登場。

三平 久しぶりね。

那智 …！ いた！ いた！ いたよ、おい！

伊達屋 師匠、捕まったのかおまえ。

三平 匿かくまってもらってんの。あんたたちこそどうして？

伊達屋 匿かくまってって…おまえ、病院の奴らがおまえのこと探してんの知らないのか？

三平 知ってるわ。あたしが嗅かぎまわったせいだね。

那智 そのお陰でえらい目に会ってんだぞ。ゴメンナサイの一言もないのか。

三平 ごめんな。

那智 ごめんな、の一言しかないのか！

三平 ゴメン、ゴメン。

那智 あ、許す許す。

伊達屋 オイ、ふざけてる場合か！ それがわかってんのになんでこんなところにいる。

ここは芦沢病院の新館だぞ！

三平 嘘…嘘でしょ？

伊達屋 嘘じゃねえ。

潤子 ここしかないのよ、彼らが探さない場所は。

三平 そういうことだったの…盲点ってわけね。

潤子 今まではね、でももう駄目。病院側がここを使い始めたら人の出入りも激しくなるわ。もうここは使えない。とにかく早く裏へ…。

歩きだそうとする潤子。
銃声。
倒れる潤子。

三平 あっ。

銃を構えたインコ、登場。

インコ 三平郷子だな。

那智 セキセイインコ…。

西崎 尾行^{っけ}られたんだ。

インコ 三平郷子だな。そうだと見え。

四人は凍りついている。

インコ …そうだと見えればオレの仕事は終わる。

西崎 あんたの仕事つてのは三平郷子を探すことだろう。だったらもうお役御免じゃないか。

インコ 引き金を引くまでがオレの仕事だ。

伊達 俺たちを尾行^{っけ}てたのか。

インコ そうだ。お前らを泳がせておけば、必ず三平郷子にたどり着くと信じていた。

伊達屋 最悪の偶然だったってわけか…。

インコ これが最後だ。三平郷子だな。答えろ！

三平 答えても答えなくても撃つんでしょ。

インコ その通りだ…。死体にしてからいくらでも確認はできる。

三平 …。

インコ、引き金に指をかける。

観念して目を閉じる四人。

夏目、インコの背後に登場。

インコを昏倒させる。

夏目 ああ、あんたたち、偶然ねえ。

夏目、インコの銃を取り上げる。

那智 助かった…。

西崎 夏目さん、この人が撃たれたんだ。見てくれ。

夏目、かがみ込んで潤子を診て舌打ちする。

夏目 …駄目だ。死んでる。

夏目、潤子の懐からフィルムと鍵束を見つけ、自分のポケットへ移す。

夏目 とにかくここを出るんだ。急げ。

遠くで複数の靴音が響く。

夏目 上だ。階段で上へ行け！

五人、退場
暗転。

芦沢病院新館。
最上階のひとつ下。
夏目、那智、西崎、三平、伊達屋、登場。

夏目 この上が最上階らしいな。

伊達屋 一番上まで行くのか？

夏目 いや、ここでいい。

那智 どうするんだ。飛び降り自殺でもするのか？

夏目 まだ早いな。

那智 逃げ出せんのかよ？

夏目 さてね。取り敢えず囲まれてることは確かだろうな。

三平 どうするの？

夏目 待つな。

三平 待つてなにを？

夏目 向こうは俺たちを消すつもりだ。かと言ってまさかビルに火はつけないだろ。そのうち必ず誰かが上がってくる。

西崎 上がってきたら困るじゃないか。

夏目 上がってきたらチャンスなんだ。このまま囲まれてたら絶対逃げられないんだから。

西崎 どうもあんたの言うことはわからんな。

夏目 まあいいだろ。とにかく焦ったって始まらない。先に向こうが動くのを待つんだ。

伊達屋 郷子。おまえなにを追っかけてる。なんでこんな羽目になった？

夏目 おれもそれが知りたいねえ。ま、だいたい見当はつくがね。

三平 ……

夏目 下で殺された女、前原潤子。彼女はつい最近まで芦沢病院の看護婦だった。殺した男は右翼系の荒事師だ。ずっと辿っていけば黒崎まで繋がってる。

那智 黒崎って誰。

夏目 ニッポンの黒幕だよ。財閥やおつかない右翼のボスと仲良しで、おまけに国家権力と密通してる。日本で一番暴力的な影響力を持ったお年寄りってわけだ。電車の中で会ったら席を譲ったほうがいいぜ。

那智 ……へえー。(感心している)

夏目 その黒崎の孫がこの病院に入院していた。三年前のことだ。生まれつき心臓が悪かった。

伊達屋 心臓？ だけどこの病院は…

夏目 頭カマだな。

伊達屋 どういうことだよ。

三平 ……脳死移植よ。

伊達屋 ……

三平 三年前の同じ時期に、竹本卓っていう患者がいたの。薬物の大量摂取による呼吸不全で死んだってことに表向きはなってるわ。でも実際は…

伊達屋 心臓を移植したって言うのか。

三平 そうよ。脳死状態の竹本卓の心臓を取り出して黒崎の孫に移した。ドナーが本当に脳死状態だったのかどうか。移植を受けた黒崎の孫はどうして死んだのか。真相はわからない。すべては完全に秘密のまま行われた…。

伊達屋 黒崎の命令で、つてわけか…。確かにすげえ話だな、そりゃ…。

那智 …あのう、ちよつと聞いていいかな？

伊達屋 …ん。

那智 脳死つてどんなの？

伊達屋 あのなあ…。なんでおまえはそう見事になんにも知らないんだよ。

那智 すまん。

伊達屋 だから脳死つてのはなあ…。えーと…

西崎 深昏睡、自発呼吸の停止、瞳孔の拡散、脳幹反射の消失、脳波の平坦化、以上の六時間以上の継続。それが脳死の一般的な基準です。

那智 さつすが予備校教師。…わかるように言ってくれよう。

西崎 心臓が動いているだけの死体、それが脳死状態です。

那智 あ、わかった。あれだろほらフランキー堺の…

伊達屋 フランク永井だろ。

那智 あそうか。

西崎 あれは脳死じゃなくて植物状態^{ベジタブル}。

夏目 …ちよつと聞いていいか？

伊達屋 ああ。

夏目 (那智を見て) どうしておれの事務所に、この病院のことを知らせてきた？

那智 そりゃあ、…えーと。

夏目 おれが一番不思議なのはそこだ。あんたもだ。三年も完璧に護られてきた秘密を、いったいどうやってほじくり返してきたんだ？

三平 …。

伊達屋 いいよ。…夏目さん、あんたには話そう。まあ、馬鹿な話だ思われるだろうがね。

伊達、新聞紙の切れ端を出す。

伊達屋 こいつや。

夏目 …。

伊達屋 日付を見てくれ。

夏目 …。

伊達屋 なんの冗談かと思っただろう？ そいつがどこから来たのかはわからん。だがおれたちはそれを本気にしてる。その競馬の記事な、それでイッパツ当てようつてね。…だけどこいつだけは、ちよつと違つところに目がいったらしい。その裏っかわの…左の隅のほうだ。…そう、それだよ。

夏目 …(全員顔を見回す)…信じられんな…。こんなバカげた話は初めてだよ。

伊達屋 みんなさ。おれたちみんな、こんなバカげた話は初めてだ。つけくわえるならば、おれたちはみんな、バカげた話が好きなんだよ。

夏目 しかし現実はこの病院にはスキャンダル タネがころがってた…ことは…。

西崎 その新聞も本物かもしれないってことだね。

夏目、物音に気づく。
足音。

夏目 シッ。…おいでなすつたな…。

夏目、様子を見に行き、戻る。

夏目 …下の階まで上がってきてる。

那智 どうするんだ？

西崎 やり過ごして下へ、か。

夏目 正解だ。窓の外にへりがある。そこへ。

五人、退場

銃を持った男、登場

部屋を見回し、退場

五人、登場

夏目 下だ…。

五人、退場

一階。すでに前原潤子の死体はなく、インコの姿も見えない。

五人、登場

夏目 表はヤバイ。おれが入った裏の部屋の窓から出る。そこから出ればすぐ病院の塀がある。そいつを乗り越えて…走れ！

銃声。

夏目の腕を掠める。

夏目、倒れつつ、銃を抜く。

インコ (登場)…待ってたよ。

夏目 いけ！ いいから走れ！

再びインコが発砲。

背中など真ん中を撃たれ、那智、倒れる。

ほぼ同時に夏目が発砲。

インコ、足を射抜かれ倒れる。

那智に近寄る夏目。

夏目 …即死だ。

那智の死体を囲んで言葉もない四人。

銃声を聞きつけたか、上からの足音が響く。

夏目 行け！ いいから逃げる！

伊達屋、三平、西崎、退場

夏目、最後に退場

暗転。

ACT 12 密会

映画館のようなところ。
古い洋画がかかっているらしく、雑音混じりのセリフや音楽が聞こえる。
芦沢院長がひとり座ってそれを観ている。
夏目登場。

院長 … 腕の具合はどうかね。

夏目 ああ、順調ですよ。お陰様でね。

院長 そりゃあ良かった。君に撃たれたあの男も命は取り留めたよつた。

夏目 ロクでもないのばかり生き残りますなあ。しかし、ま、よしんば奇麗にこの世とおさらばできたとしても、昨今じゃ死体からでも役に立つところは頂こうって手ぐすね引いてる輩がいる。まったく現実ってやつは侮れんもんですなあ。

院長 日本という国は変化を好まない。脳死を死と認めることでどれだけの苦しみと不毛な努力が救われるか、それがわかっていながら何一つ変わってはいかん。そうは思わんかね。

夏目 高邁な議論の腰を折って申し訳ありませんが、よかつたら少し現実的な話をさせてもらっていいですかね。私はしょせん一介の探偵だ。仕事は早く済ませて家に帰って水曜ロードショーでも眺めながら一杯やるのが楽しみなんでね。

院長 フィルムは持ってきたかね？

夏目 そこまで間抜けじゃない。…これがプリントです。前原潤子が病院から持ち出したフィルム。写っているのはカルテの原本。筆跡はあなたのだ。ドナー竹本卓。こっちはレシピアント…黒崎の孫ですな。先天性僧帽弁閉鎖不全…。日本で二度目の心臓移植の、これこそ動かぬ証拠ってやつですな。

院長 せっかく腕も治りかけたというのにそんなものを持ち歩いては、長生きできんな。

夏目 院長…私はね、こいつを表に出す気はない。あなたが俺たち五人を放っておいてくれれば、こいつは公開しないと約束する。三平にも騒がせない。私もプロの端くれなんですよ。全面戦争になったら勝ち目はないまでも、猫の鼻面を噛む鼠の真似くらいは、やってのけますよ。

院長 … 私には止められんよ。

夏目 やってもらわなきゃあなたと俺たちは心中だ。こいつが表に出たとき、上の奴らが真つ先にやることは、あなたの口を塞ぐことだろうからね。それはあんなだつてわかっているはずでしょう。

院長 …。

夏目 院長。あなたさつき、このことで多くの苦しみが救済されるっておっしゃいましたね。本当にそうですか。解放されるのはいつ病気で倒れるか戦々恐々としてる上の奴らの苦しみだけじゃないんですか。

院長 …。

夏目 … 私の言いたいことはそれだけです。…どうもお邪魔しました。

夏目、去りかける。

夏目 ひとつだけ、教えて下さい。移植を受けた黒崎の孫はなぜ死んだんです？

院長 … 拒絶反応による免疫不全だ。移植から十一ヶ月後だった。
夏目 …。

夏目、退場。
院長、ひとり残る。
暗転。

ACT 13 結末

伊達の部屋。
伊達、マリ、三平がいる。

伊達屋 会社は？

三平 本日付けでね。チョンよ。

伊達屋 そうか。

三平 ……マリちゃん。

マリ ン。

三平 ……ごめん。

マリ うん。

三平 あたしマリちゃんもつと怒るかと思ってた。あたしが自分のことばかり考えて余計なことさえしなきゃ、彼、死なずに済んだのにな……そう言われてもあたしなにひとつ否定できないのよ。

マリ そうね。

三平 なんてそう言わないの？ あたし言っただけなのよ。

マリ なんてだろうね。そうね……以前のあたしだったら、きつとそう言ったね。

三平 ……。

マリ 美由紀さんに、会ったからかな。

三平 みゆき…？ 誰？

マリ よくわからない。夢かもしれない。…彼女ね、どこにもいないの。でもどこにでもいるの。それで彼女、しあわせだった。

三平 ……。

伊達屋 マリちゃん、それ…

マリ なに？

伊達屋 西崎の…？

マリ なに？ 西崎先生がなんか関係あんの？ そう言えば今日、先生は？

伊達屋 西崎は病院だ。おまえ、病院であいつに会ったんだってな。

三平 ええ。知り合いが入院してるって……。

伊達屋 その病院に行ってる。…女房に会ってる。

マリ 女房って…嘘…

三平 彼、結婚してるの？

マリ してる。五年前に。美由紀という。五年前、結婚してすぐ、事故に遭った。頭蓋骨陥没。脳にちよつとだけ傷がついた。五年間、病院のベッドの上にいる。

マリ ……。

三平 五年間、ずっと？

伊達屋 呼吸もする。目も開いて瞬きもする。食事を口に運べば噛み砕いて飲み込みもする。生きてるんだ。…だけど、それ以外のすべてのことが、できなくなつた。…師匠。

三平 ……なに？

伊達屋 おまえと、瓜二つなんだ……。

三人の動きが止まる。
電子の心音が響きはじめる。
三人の間を縫って西崎が登場。
美由紀の病室。

西崎
：それで結局、話は探偵がつけてくれたらしい。おれたちには詳しい話をしないけど、とにかくこの件をこねきり忘れること、誰にも口外しないこと、そう探偵は言ってたよ。そうすれば向こうも、これ以上手出しはしないはずだって。誰にも言うなってな。…今、全部喋っちゃった…。おれがおまえに喋るのはいいよな。…まずいかな。どっちでもいいや。もう喋っちゃったしな。……そろそろ帰るよ。明日また来る。明日も、あさっても…その次も…

暗転。

ACT 14 大穴

探偵事務所。

田島と、新聞を読んでいる夏目。
ラジオ放送が流れている。

暑さが酷い。

夏目、ラジオを消す。

夏目 田島君。

田島 なんてしよう。

夏目 そろそろクーラー買い換えはないか。今年は猛暑だってホラ新聞にもハッキリ書いてある。

田島 そんな余裕はありません。

夏目 そんなはずないだろう。先月のタンザニア大使館員失踪事件でタンザニア人からガツポリせしめたじゃないか。あれはさすがにまだあるだろう？

田島 そこから二ヶ月分の家賃を引いて私の去年の冬のボーナスを引いて、五月に購入した所長用の九十二キロしかでないクーパールのローンの残金を引いたあと、そこにある郵便物の束をご覧下さい。その上でクーラーの件はもう一度話し合いましょう。

夏目 …君の口は季節を問わずよく回るなア。感心するよ、まったく。

田島 お褒め頂いて恐縮です。

夏目、郵便物の束を手にとって眺める。

夏目 電気料金、国民健康保険、ガス料金、NTT、NHK、CIA、KGB…バンバント。一本足りませんなつ、と。

田島 なにかおっしやいました？

夏目 いいや、なんにも。

夏目、封筒を取り上げる。

差出人を見て渋い顔で尻ポケットにねじ込む。

次の封筒を見る。

「夏目明様」とだけ書かれている。

夏目 …なんだいこりや。

夏目、封を切る。一枚の紙片が出てくる。

田島 …なんですか？

夏目 …馬券だ。なんだろつコレ。

田島 所長に競馬の趣味があたりとは知りませんでした。

夏目 よせよ、競馬なんて学生ときやったきりさ。…この封筒に入ってたんだよ。

夏目、はっとしてあたりを見回す。

新聞を取り上げ、日付を確認する。

田島 …？

夏目、あらためて馬券に見入る。

そしてゆっくりと、何事かを思い出す遠い目で窓の外を見る。

夏目 そつか…一年、経ったのか…。
田島 所長？

夏目、田島に馬券を渡す。

夏目 君、持ってきてくれ。…もしかすると、クーラーが買えるかもな。…出かけてくるよ。

田島 あら、どちらへ。

夏目 (振り返ってウィンク) 散歩。

夏目、退場。

田島、ラジオをつける。軽快な音楽。

田島、退場。

セミの声。

なにもなくなつたゆう子の部屋。

大きなゴミ袋を持ったゆう子、登場。

ゆう子、部屋を見回す。

ゆう子、那智のシャツを手にする。

ゆう子 ……。

ゆう子、心を決めて、シャツをゴミ袋へ。

修二、登場。

修二 ……。

修二は一度目を合わせたきり、顔を背けている。

ゆう子 (修二の様子に思わずクスリと笑ってしまう) あんたさ、いったいいくつ合鍵持ってるの？

修二 ……。

修二、少し肩の力が抜けて、笑みを浮かべる。

ポケットから同じ鍵がぎゅしりの鍵束を出す。

ゆう子、笑い出してしまふ。

修二 (部屋を見回して) ……越すのか？

ゆう子 うん。

修二 これからどうすんだ？

ゆう子 わかんない。こっちで暮らすのにも飽きちゃったし…帰ってみようかな。田舎

にでも。

修二 ……。

ゆう子 どうしてるの？

修二 ……相変わらずだよ。

ゆう子 そつ。まあ、あたしもよ。相変わらず。

修二 そつか。

ゆう子 ……その鍵束、もったいなかったね。

修二 ああ。

ゆう子 ……貸して。

ゆづ子、修二から鍵束を奪つ。
ゴミ袋に捨てる。

修二 ……

ゆづ子 行こ。

修二 ……

ゆづ子 もつ荷造りしちゃったから、なんにもないの。外に出よ。お茶齎って。
修二 ああ。

ゆづ子、修二、退場。

予備校の授業中。

桑田登場。

桑田 …… 諸君！ この夏こそだ！ この夏こそライバルに差をつける時だ。他人のことなど気にするな。他人に敵しく、自分にはその百倍敵しく、そして…！

トヤドヤと刑事たち、登場。

桑田 な、なんだあ。

刑事 桑田浩二だな。（手帳を見せる）麻薬取締法違反の疑いで逮捕する。

別の刑事、逮捕状を見せる。

桑田 な、な…

刑事 大人しくしろ。

刑事、桑田に手錠をかける。

桑田 わあ。ちよつとちよつと…

刑事 連行しろ。

桑田 ちよつと待ってよ！ おれだけじゃない。おれだけじゃないんだよ！

刑事たち、桑田を連れて退場していく。
入れ替わりに西崎登場。

桑田 あつ、西崎さん、なんとか言ってくれ。あんただって同罪じゃないか！ 西崎さ

ん！ 西崎イーツ！

西崎 おいおい、人聞きの悪いこと言わないようにね。刑事さんたち本気にするじゃないか。ははははは。

西崎、教壇に立つ。

西崎 それでは桑田先生が麻薬取締法違反でパクられてしまいましたので、かわって私、西崎がお相手いたします。…みんな乗ってるかあつ！

大歓声。

暗転。

美由紀の病室。

美由紀と西崎。

電子の心音。

西崎 そんなわけでき、桑田って言うおれの同僚がパクられちゃってね、大騒ぎだったんだよ。おれはだいたいじょつぶさ。危ないことはもうやめた。あいつ、要領が悪かったんだよ。要領か、運か、なんかそんなものがさ、悪かったんだよ。おれはさ、どこも悪くないし、絶対調だよ。美由紀…なあ、もうすぐ一年になるなあ…那智が死んで。ときどきあいつのこと思いつくけど、あいつも、運か要領か、なんかそんなものがさ、悪かったんだと思つよ。なあ、美由紀。おれは悪くないよ。どこをとつてもさ。完璧だよ。今まで荒稼ぎした金、全部今日のレースにつき込む。伊達たちには内緒で、あいつらの倍は買う。…必ずくるよ。おれにはわかつてるんだ。…もう予備校の教師もやめた。おまえももつと設備のいい外国の病院に移るんだ。おれももちろんいっしょだ。二人で外国で暮らすんだ。約束通りにな。…そんな約束しなかったっけ？…まあいいさ。…なあ美由紀、完璧だろ？…くるさ、必ずくる。結果はわかつてるんだ。未来は変わらないさ。…

西崎、しばらく黙る。

電子の心音が、不意にピーという連続音に変わる。

西崎 …。

西崎、状況を把握できない。

西崎 ……美由紀……………

西崎、美由紀に近寄って顔を眺めるが、いつもの条件反射的な瞬きさえ止まっている。

西崎 …。

西崎、長い間口をきかない。

やがてライターを取り出し、美由紀の顔に近づける。

ライターの火のみ残り暗転、やがてそれも消える。

伊達の部屋。

伊達とマリ、登場。

馬券の束を投げ出す。

マリ とうとう買ったね。

伊達屋 買った買った。今さら後戻りできるか。

マリ ねえ、あたし今月ひとつも仕事入れてないの。絶対くるよね。

伊達屋 くる！と思う。きつとくる。くるはずだ！…と信じている。

マリ はつきり言ってよお。

伊達屋 くる！…と思う。

マリ なんて、と思う、をつけるのよお。

伊達屋 うーん、人の性格というものはそう簡単には変わらないんだよ。

マリ あたしね、昨日眠れなくてさ、考えたの。

伊達屋 いかん！考えちゃいかん口ウ、こーゆーことは。

マリ だってさ、この新聞にはさ、レースの結果が出てるけどさ、裏にはあの病院の事件も出てるわけでしょ？

伊達屋 考えちゃいかんチャ。

マリ ということは、この新聞がまあ未来からやってきたとして…

伊達屋 暮れえゝなずうゝむ街のゝ

マリ …その未来って言うのは芦沢病院事件が世間にバレちゃってる未来なわけじゃない？

伊達屋 ひかゝりとオかげのオゝなかあ…

マリ 聞きなさいよ！

伊達、観念して黙る。

マリ でも本当はあの事件は一年前にもみ消されちゃったわけで、今、世間であの事件のことを知ってるのはあたしたちだけじゃない。つまり未来はこの新聞とは違っちゃってるわけよね？

伊達屋 まあなあ…畜生、女ってこれだからな…。

マリ つまり未来は変えられるし、変わる可能性があるってことで、ということはこのレースだって確実に来るって保証はないわけじゃない？

伊達屋 ごもつともだ！ けどおれたちはレースに関係のある人間には接触してないし、このことは誰にも喋ってない。だからおれたちっていう、未来を知ってしまつた人間の存在も、このレースにまで影響を及ぼさないはずだ。

マリ …と思つ？

伊達屋 と思つ。

マリ そう言いきれる？

伊達屋 いずれにせよこいつはギャンブルなんだぜ。考えても始まらないし、ここには現に馬券の山があるんだ。おれが言い切れるのはそれだけだよ。

マリ もし、当たつたら…

伊達屋 もしじゃない、当たるさ。

マリ もし当たつたら、結婚してみない？

伊達屋 …。

マリ わたしのコト、いや？ 仕事もやめるよ。

伊達屋 …当たれば、だろ？

マリ だからもし当たつたらって言うてんの。

伊達屋 そんなこと、ずっと思ってたのか？

マリ 今、思いついたの。当たつたらなにか特別なコトするんだって思ってた。でもね、特別なことってなんだろうって考えても、なにも思いつかなかつたんだ。で、今、突然。

伊達屋 今、突然、思いついたのか？

マリ ひらめいたの。

伊達屋 …。

マリ 冗談よ、冗談。そんな複雑怪奇な顔しないで。

伊達屋 怪奇は余計だ。

マリ …あたしね、健一のぶんも買ったの。

伊達屋 おまえもか…。…実はな…おれも。

伊達屋、一束余計に出す。

マリ ありがと。

伊達屋 はは（照れる）…西崎はどつしたんだろ。

マリ　ねえ、まさか来ないってことないよね。
伊達屋　来るさ、あいつが一番乗り気だったんだ。来る！…と思うよ。

チャイムの音。

伊達屋　はい？

三平、登場。

伊達屋　師匠！

三平　お久しぶり！

マリ　どうしたのよ、全然連絡しないで。

三平　心配した？

マリ　ううん、しない。

三平　どうもありがと。

三平、書類の入った封筒を投げ出す。

伊達屋　なんだこれ。

三平　記事の原稿。昨日これで徹夜しちゃった。

伊達屋　見ていいの？

三平　そこに出して見ちゃいかんて言うわけないでしょ。見せに来たのよ。

伊達、目を通し、驚愕する。

伊達屋　おまえ、これ…

三平　今日の夕刊に載るわ。超特大のスクープよ。

マリ　これ…あの事件の…

伊達屋　おまえ、こんなもの新聞に載るわけないだろう。

三平　セキセイインコが来たの。

伊達屋　…。

三平　それよく見てよ。あたしたちが知らなかったことまで書いてあるから。インコが資料をくれたの。

マリ　どうして？ 全然話が逆じゃない。

三平　話が逆になったのよ。反黒崎グループが権力を握った。それでこの事件をスクープさせることになった。セキセイインコはそう言ったわ。だからマスコミへの圧力も消滅する。この事件は世の中に晒されるのよ。

伊達屋　つまり、えー、どういふことかというの…

三平　つまり…どういふことよ。

三平、馬券の束を取り出す。

三平　明日から毎日のように芦沢病院事件は新聞を賑わすの。手を変え品を変え、みんなが飽きるまで。レースの結果と一緒にね！

伊達屋　…行くの？

マリ　え、どこ？

伊達屋　競馬場だ。こうなりゃこの目で見届けなきゃ、どっちに転んでも気がすむめえ。
マリ　うん…でもさ、西崎先生どうするの？

伊達屋 書き置きでもしときゃいいさ。行くつぜ！
三平 間に合う？ 出走まで一時間も無いわよ！
伊達屋 急げ！

三人、退場。

芦沢病院。

本郷、登場。

夏目、登場。

夏目 本郷さん。

本郷 …… ああ、夏目さんでしたね。その節は…。

夏目、封筒を本郷に手渡す。

夏目 これ、お返ししますよ。

本郷 夏目さん。

夏目 受け取る理由のない金は受け取らない主義でね。去年の件は精算済みのはずだ。

本郷 黙って納めてもらえませんか。

夏目 あたしもプロなんですね。その心配は無用です。口止め料のつもりなんですよ？
キレイ事はよろしゅうや、本郷院長。

本郷 …… あの事件が公表されます。

夏目 それで先手を打って芦沢院長は辞職。後釜に院長の片腕だったあんたが座った。
まあ、あんたの狙い通りですな。

本郷 夏目さん、私は…

夏目 前原潤子は先走り過ぎたんですなあ。あんたにしてみれば、こつという形になるまで待ちたかったわけだ。彼女が正義感のみで突っ走ってすべてを台無しにするのをあんたは恐れた。

本郷 夏目さん。

夏目 たぶん彼女は、あんたの態度からなにかを感じとっていたんでしょ。正義のために戦っているはずの反乱組織のボスが、実は自己保身と我が身の出世を考えてる。彼女にはそれが我慢できなかった。

本郷 私は… 私は彼女を、彼女を護りたかったんです。組織の一員としてでなく…

夏目 女として… っわけですか。

本郷 そして結局は、失う羽目になった。

夏目 …… 皮肉なもんですな。

本郷、初めて疲れた笑顔を見せる。

夏目も笑みを返す。

夏目 (ふと時計を見て) ちょっと失礼。

夏目、小型のラジオを出す。

競馬中継が流れ始める。

夏目 ちよいと当て込んで込んでましてね。このレースだけ聞かせてもらっていいですか。

本郷 どうぞ。実は私も競馬に目がなくて。毎週買ってるんですよ。

夏目 ほっ、で、なにを？

本郷、馬券を見せる。

夏目 (ニヤリと笑って) 本命ですか。

本郷 このレースは固いですよ。誰が見ても銀行レースでしょう。

夏目 それはどうか…。

競馬中継に聞き入るふたり。

舞台の別の場所に、修二、登場。

ゆう子、登場。

ゆう子 (修二の隣に寄り添って座る) 競馬？

修二 あー。

ゆう子 どれに賭けたの？

修二 オレ、穴しか買わんもん。来たらでかいぞ。

ゆう子 アナって？

修二 一番、人気のない馬。あのオレンジ色のやつ。

ゆう子 あれが一着になればいいの？ なんていう馬？

修二 トキノミコト。

競馬放送に見入るふたり。

舞台の別の場所に、伊達、三平、マリ、走って登場。

伊達屋 間に合ったかあ？

三平 出走してるわ、もう走ってる！

マリ あたしたちだって走ってるわよ…(ゼイゼイ)。

スタンドにたどり着く三人。

西崎、登場。

西崎 よう。来たか。

伊達屋 西崎！

西崎 トキノミコト三番手だ。先行型にしては出遅れたな。

マリ なによ、抜け駆け？ 心配したのよ。

三平 で、買ったの？

西崎 …。

マリ 買ったんでしょうね！ ひとりで降りるなんてルール違反だからねっ！

西崎、黙って馬券の束を覗かせる。

伊達屋 コノヤロー、かっこつけんな！ (笑う)

三平 ねえ、第四コーナーよ！

マリ まだ三番手！？

実況放送が昂揚する。

四人が見守るなか、トキノミコトは奇跡の追い上げを演じ、ゴールに駆け込む。
大歓声。一着である。

伊達屋 …。やった…。

叫び声を上げて抱き合つマリと三平。
ガッツポーズの西崎。ひたすらぼつ然の伊達屋。
修二に抱きつくゆづ子。
自分の馬券を破り捨てる本郷。それを横目に優雅に一礼して去る夏目。
雪のように、馬券が降りしきる。
暗転。

ACT 15 ナイーブ

数日後。伊達のマンションの廊下。
ゆづ子、大きな荷物を持って登場。
伊達、登場。

ゆづ子 あ、すみません、302号室は…。

伊達屋 あ、この奥ですよ。ボクの部屋となり。

ゆづ子 どうも。…越してきたんです。よろしく。

伊達屋 あ、ボク今日で出るんですよ。

ゆづ子 あ、そうなんですか…。

伊達屋 スレ違いですね。…まあ、ここはけっこう静かですよ。

ゆづ子 どうも。

伊達屋 じゃ、どうも…。

ゆづ子、退場。

伊達、退場。

伊達の部屋。

三平、マリ、西崎、登場。

伊達、追って登場。

伊達屋 いやあ、ご苦労さん。終わったな

マリ 広がったんだねえ、この部屋

郷子 ものがなくなるとね…。

西崎 …今夜の便で行くのか。

伊達屋 ああ。九時成田だ。

郷子 じゃああんまり時間ないわね。そろそろ出ないと。

マリ この部屋ともお別れね

伊達屋 …そうそう、言おうと思ってたんだけど、…こいつどうする。

伊達、新聞の切れ端を出す。

伊達屋 ま、今となつてはなんの価値もない新聞の切れ端だけだな…。

マリ でも、記念みたいなもんじゃない。

西崎 おまえ持っていたらいいよ。

伊達屋 …いや…。この部屋に置いていくよ。

三平 (新聞紙を取る)これがどこからきたのか、結局わからなかったわね。

マリ (新聞紙を取る)これがなかったら今頃どうしてたかしら、あたしたち。

三平 ホントね…。これがなかったら…。

西崎 (新聞紙を取る)…。

一同、少し黙る。

伊達屋 (新聞紙を取る)もしこいつがこの部屋に落ちてなかったら…。

一同、伊達屋を見る。

伊達屋は友人の表情からなにかを読みとろうとするように、無表情な西崎を横目で見る。

伊達屋 なにも変わらないさ。………たぶん。

伊達、新聞紙を椅子の上に置く。

伊達屋 ……じゃあ…。

四人、小さな缶ビールで乾杯する。

伊達とマリ、手を振って、寄り添って出ていく。
三平と西崎が残る。

三平 ……

西崎 ……

ふたりは一度だけ目を合わせたきり、沈黙が流れるに任せている。
ふたりは動かない。

やがて、三平、思い切るように缶ビールを飲み干し、出ていこうとする。
西崎、動いて三平の腕をとる。

三平 ……

僅かな抵抗のあと、許容、そして抱擁。

急速に暮れてゆく空。

抱き合ったまま、なにかが壊れることを恐れるように、動かずに立ち尽くすふたり。

銃声。

西崎の腕のなかで、三平の躰が硬直する。
ゆっくりと崩れ落ちていく三平の視線が、一瞬だけ西崎の視線を捉える。

西崎、崩れ落ちる三平の躰を椅子に座らせる。
いつも美由紀が座っていたその位置に。

西崎、手にした銃を離し、椅子に座り込む。

西崎 ……

ほんの一瞬、子供のようにしゃくりあげる西崎。

のろのろと涙をふいて、立ち上がり、新聞の切れ端を取り上げる。
新聞紙を手に、三平のかたわらに膝をつく。

物言わぬ三平に向かって、事の顛末を熱心に話し始めるが、その声は聞こえない。

舞台は闇に溶けていく。

幕。